一般財団法人
和歌山陸協広報

第８号
平成31年4月1日（月）発行
一般財団法人
和歌山陸上競技協会育成委員会
〒641-0014 和歌山市毛見200
紀三井寺公園陸上競技場内
ＴＥＬ・ＦＡＸ073-444-3662
E-mail
wariku30@yahoo.co.jp

和歌山陸上競技協会設立90年 諸先人の努力に感謝と敬意を

一般財団法人・和歌山陸上競技協会
会　長・林　泰行

一般財団法人和歌山陸上競技協会広報誌第８号を発刊するにあたり一言ご挨拶を申し上げます。

２０１９年を迎え、会員各位におかれましては、ますますご壮健で活躍されていることとお喜び申し上げます。

1928年（昭和3年）6月、和歌山陸上競技協会が設立された当時のメンバー。日本選手権優勝者など現役の選手も多く含まれている。
（旧和歌山高師＜現和歌山大学付属小・中学校＞グラウンドで）

一昨年に、会長はじめスタッフの役員が改選され新しい息吹でスタートした当協会でありましたが、若いスタッフの力の結集もあって、素晴らしい運営ができ、エバーオンワードの言葉どおり力強く前進することができました。

さて、本年度は、第３２回全国健康福祉祭和歌山大会・ねんりんピック紀の国和歌山大会が１１月９日から１２日の期間において本県全市町村で開催されます。また、２０２０年東京オリンピックが開催されますが、オーストラリア陸上競技代表選手団が事前合宿として、ここ紀三井寺公園陸上競技場でキャンプが計画されています。

会員各位におかれましては、上記の大会・合宿等の成功を期するために大きな力を発揮していただきたいと存じます。

本年度も、国民体育大会・都道府県対抗女子・男子駅伝大会等、都道府県対抗の成績向上のためにも選手強化対策委員会を中心として選手強化に取り組んでいただき、素晴らしい成績をおさめていただけるよう心よりご期待申し上げるものであります。

当協会と致しましては、競技力向上対策と各競技大会の運営に最大限取り組んで両輪がうまく機能するよう鋭意努力精進するものであります。

さらには、当協会は、本年６月に創立９０周年を迎えることとなります。素晴らしい諸先人各位のご努力により歴史と伝統に輝く協会を設立され現在に至っておりますことに心から深く感謝と敬意を表するものでございます。

この素晴らしい、伝統を私たちは受け継ぎ未来に向かって健全なアスリートの育成を目指し、協会づくりのため邁進することをここにお誓い申し上げ、発刊のあいさつといたします。

平成30年度の活躍状況

やったぞ！9位

第24回全国都道府県対抗男子駅伝

過去最高順位だった26位を大幅に上回る9位でゴールインする和歌山県チーム（中央）。アンカーは寺内将人選手（愛知製鋼）。
（**写真提供　陸上競技マガジン**）　<本文参照>

三段跳　16m04

第73回福井国体・少年男子共通三段跳で16m04を跳び優勝した荒木基選手（和歌山北高3年）。200m21秒36、走幅跳7m41と合わせて3種目の県高校記録保持者となった。
<本文参照>

U18走高跳優勝１ｍ７４

U18日本陸上競技選手権大会で和歌山北高校2年の松本万鈴選手が走高跳で見事優勝。1m74の記録は浜口真由美選手（和歌山北高校）の記録を34年ぶりに更新する県高校新記録だった。<本文参照>

平成30年度　郷土選手の活躍状況

《全国大会》

2018日本学生陸上競技個人選手権大会(平成30年6月15日~17日 神奈川・Shonan BMWスタジアム平塚)

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	5000m	2	橋詰大慧	青山学院大	13分47秒32
女	1500m	1	橋本奈津	京都産業大	4分25秒52

第102回 日本陸上競技選手権大会(平成30年6月22日~6月24日・山口 維新百年記念公園陸上競技場)

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
女	やり投	6	助永仁美	オークワ	54m45

第45回全日本中学校陸上競技選手権大会(平成30年8月18日~8月21日・岡山県総合グラウンド陸上競技場 シティライトスタジアム)

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	砲丸投	3	小林聖	南部中	14m56

第87回日本学生陸上競技対校選手権大会(平成30年9月6日~9日 神奈川・等々力陸上競技場)

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
女	1500m	2	橋本奈津	京都産業大	4分28秒53
女	円盤投	3	酒井梨々華	東京女子体育	48m89(県新)

第66回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会(平成30年9月21日~23日 大阪・ヤンマースタジアム長居)

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	棒高跳	6	田中僚	和歌山県教育	5m20
男	走幅跳	5	手平裕士	オークワ	7m58
女	円盤投	6	助永仁美	オークワ	42m64
女	やり投	5	助永仁美	オークワ	52m88

第７３回国民体育大会（平成３０年１０月５日~９日・福井 福井県営陸上競技場）

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	成年100m	3	九鬼巧	NTN	10秒80
男	少年共通三段	1	荒木基	和歌山北高	16m04
男	少年B砲丸投	4	井戸良	日高高	16m13
女	成年やり投	5	助永仁美	オークワ	54m23

第49回ジュニアオリンピック陸上競技大会(平成30年10月12日~14日・神奈川 日産スタジアム)

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	B男子砲丸投	1	大島ブルースリー	城東中	15m78

第12回U18日本陸上競技選手権大会(平成30年10月19日~21日・愛知 パロマ瑞穂スタジアム)

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
女	走高跳	1	松本万鈴	和歌山北高	1m74

＜本文参照＞

福井国体

九鬼巧選手（NTN）

成年男子100㍍　3位　10秒80
（−5.2㍍）

国体12回連続出場の九鬼選手。今年も渋いレースを見せてくれた。

福井国体100㍍は台風25号の影響で猛烈な向かい風の中で行われた。

九鬼選手は山縣亮太選手の10秒53に次ぐ10秒68で予選を通過、準決勝も山縣選手と同じ組になり、10秒49で決勝に進んだ。

勝負強さを発揮

決勝は向かい風5.2㍍と好記録ができない状況。

九鬼選手はアジア大会100㍍で10秒00の銅メダリストの山縣選手、同じくアジア大会200㍍金メダリストの小池祐貴選手に次いでフィニッシュラインを越えた。

好調だった1年

九鬼選手は和歌山北高校2年・3年とインターハイ100㍍で連覇を果たしていて、山縣選手を抑えたこともあるトップスプリンター。

早稲田大学進学後は故障もあって、記録的には少し差をつけられていたが、今シーズンは織田記念陸上10秒47、日本選手権は10秒44、全日本実業団陸上で10秒35と好調を持続しており、順位も全て入賞と持ち味の安定性に更に磨きがかかり、ベスト記録の10秒19も更新するのではと期待がかかった1年だった。

そして和歌山思いの九鬼選手、今回で国体出場連続12回の偉業を達成した。

＜九鬼選手の話＞

和歌山県の陸上関係者の皆様、いつも見守り支えていただきまして誠にありがとうございます。

例年通り、2018年も和歌山県記録会からシーズンをスタートして、日本選手権に向けて試合と練習を行ってきました。

年々注目度が増している男子100㍍の中で、3年連続入賞をすることができました。ですが、まだまだトップ選手との差は開いている状況で、互角に走るためには私の中で何か大きく変化をつけなければいけないと思いました。

走り方を変えてみた

そこで夏から練習内容を変更して「走り方」を変える試みに挑戦しました。その中で全日本実業団で5位、福井国体では3位入賞をすることができました。

計画と結果が交差していて来シーズンに向けて大きなヒントを得ることができました。

来たる2019年は世界選手権や様々な国際大会があります。日本選手権や国体など国内の試合はもちろんのこと、世界を目指して頑張ります。

荒木　基選手（和歌山北高校3年）

男子少年共通　三段跳優勝16㍍04
（−1.9㍍）

春先から冬季練習並みの練習を始めた結果・・・。

優勝記録の16㍍04は高校記録にあと6㎝と迫る歴代3位の大記録だった。

走幅跳も県選手権で7㍍41の県高校新記録を出した。

これまでの記録は手平裕士選手（和歌山北高校）が2010年に記録した7㍍40。.

荒木選手は和歌山市記録会で200㍍を21秒36で走り、2010年九鬼巧選手（和歌山北高校）が作った21秒44の県高校記録も8年ぶりに更新した。100㍍11秒01、400㍍49秒97、走高跳1㍍90の自己ベスト記録も更新できそうな勢いの今シーズンであった。

恩返しできたかな

なお、指導者の手平裕紀先生のお子さん、裕士選手には機会があるたびにアドバイスをしていただいており、裕士さんの走幅跳の記録を1㎝更新したことは恩返しになると考えている。

身長181㎝、体重65.8㎏。山崎小学校時代は水泳と陸上をやっていた。県大会の80㍍ハードルで2位になったこともある。岩出中学校では藤田圭造先生の指導を受け、110㍍ハードルで全国大会に出場した。中学時代のベスト記録は100㍍11秒7、110㍍ハードル15秒10、走幅跳6㍍10、走高跳1㍍70だった。

2年の冬に故障した

高校2年のU18全日本選手権の三段跳で15㍍27の記録で優勝したあと、故障してしまい冬季練習ができなかった。ようやく故障が治った春先から冬季練習のメニューを開始した。手平裕紀先生はその間、種目ごとの専門家に荒木選手を引き合わせるなど万全を尽くした。春からの疲れが取れてきた夏休みあたりからようやく調子が上向きになってきて、いろんな種目で新記録が面白いように出た。勝てる楽しさも味わえた。

顧問からのアドバイス

荒木選手はこの1年間を次のように振り返っている。

「複数種目で県高校記録を出せたのがうれしい。憧れだった手平裕士選手や九鬼巧選手の記録を破れたことを光栄に思っています。お二人には走幅跳・三段跳・走力についていろいろアドバイスをいただいています。私は山本凌雅選手の動画を見て三段跳の魅力にはまりました。しかし、走幅跳と違って3回跳ぶのが難しく、何度も試行錯誤を繰り返しています。先生から200㍍などのスピードをつけることが大学や社会人でも活躍できるカギだと言われ、その通りやったら三段跳の記録も伸びてきました。私は将来、三段跳で世界レベルの大会に出られるよう努力しようと思っています。陸上で記録を伸ばすために必要なことは陸上競技を好きになることが一番大事だと思います」。

井戸　良選手（日高高校1年）
男子少年B砲丸投４位 16㍍１３

中学時代から大舞台には慣れている

福井国体少年Ｂ砲丸投げ（重さ5.0kg）で16㍍13を投げ、4位に入賞した。

円盤投を狙っていたけど

「砲丸投で4位になれてうれしかったが、共通円盤投の方が体の切れは良かった。41㍍46で16位だったけど」と話す。

6月の県大会では1年生ながら円盤投で優勝（41㍍48）、近畿大会でも41㍍47を投げたが入賞はならなかった。

8月に入り、県ユース陸上の1年砲丸投げで14㍍68の大会新記録をマーク、円盤投も42㍍77で制した。

9月の近畿ユース大会で円盤投で、2位（43㍍11）になったこともあり、国体では円盤投の方に期待が集まっていた。

練習の質を高めている

指導者の児島洋幸先生は円盤投（2.0kg）で48㍍16の記録を持っている投てきの専門家。井戸選手も、「専門技術を詳しく教えていただき、練習の質が高まり、毎日が充実している」と話す。週に3日、南山陸上競技場で練習、残りの日は短距離のダッシュを繰り返したり、補強運動・ウエイトトレーニングで筋力をつけたりしている。

川辺西小学校ではスポーツ経験はない。大成中で中本徹先生に勧誘され陸上部に入り、投てきを始めた。最初の頃は短距離の練習が大半で、100㍍を12秒6で走りリレーに出たこともある。その後、砲丸投、円盤投にシフトして3年の時には砲丸投（5.0kg）で14㍍69、円盤投（1.5kg）で42㍍43の県中学新記録を樹立した。

全国中学陸上は砲丸投で5位、ジュニアオリンピック円盤投でも5位入賞を果たした。

今後も砲丸投・円盤投を中心に投てき競技を追求していくが、中学の時、故障で苦しんだだけに「怪我をしないで冬季練習を乗り越えたい」と話した。

助永仁美選手（オークワ）
女子成年やり投　5位　54㍍23

中学時代から大舞台には慣れている

今年度、やり投でコンスタントに上位入賞を果たした。

織田記念陸上では55㍍24で6位、日本選手権でも54㍍45を投げ6位、福井国体では5位入賞（54㍍23）。全日本実業団陸上で5位入賞（52㍍88）し、円盤投は42㍍64で6位に入った。

安定した1年だった

兵庫県出身。

大成学院高校から大阪体育大学卒業。

高校時代は全国インターハイのやり投で準優勝、国体でやり投と円盤投の2種目で優勝した。大阪体育大学では関西インカレ・西日本インカレを制した。

和歌山に来た年の長崎国体でさっそく4位に入った。

翌年の第99回日本選手権（2015年）では日本記録保持者の海老原有希選手を追い詰める58㍍51の大投てきで準優勝し、わかやま国体での3位入賞へとつないだ。

周りの人に感謝

「今シーズンは織田記念で6位、日本選手権6位、国体5位と大きな大会で入賞できましたし、記録も54㍍後半から55㍍後半と大崩れはありませんでした。安定したシーズンだったと振り返っています。しかし、目指してる記録を考えるとまだまだ不甲斐ない記録だと感じます。

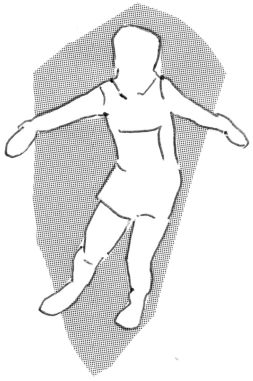
わかやま国体前年に和歌山県へ呼んでいただき、今年で5年になります。これまでは和歌山県代表として、長崎国体を皮切りに何とか得点を入れることができ、ほっとしているところです。わかやま国体が終わった後も競技に専念させていただける環境を与えて下さっている所属先のオークワや和歌山陸協の方々には本当に感謝しています。

2019年も、60㍍の投てきを目指して自分自身を鍛えていき、恩返しをしたいと思っています」。

日本選手権

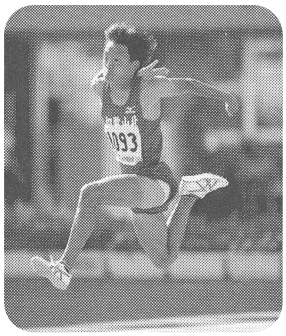
九鬼巧選手（NTN）
男子　１００㍍
８位　10秒44

助永　仁美選手（オークワ）
女子やり投
６位　54㍍45



全日本実業団陸上

有松　今日選手
（新潟アルビレックスランニングクラブ）
男子三段跳　5位　15㍍68



写真は沖縄インターハイ三段跳4位の跳躍

「今大会は怪我もなく、良い状態で大会を迎えることができていたので、最低でも3位入賞そして16㍍を跳ぶことを目標にしていましたが、15㍍68で5位という結果に終わってしまいました。その中でもこれまで課題としてきた安定感が出てきたので、来年に向けて冬季練習をしっかり積んでいきたいです」。

小学校でのスポーツ経験はない。姉が陸上をしていた影響で日進中学で陸上部に入った。100㍍13秒5、三段跳11㍍ぐらいの選手で県大会に出たことはなかった。顧問の玉置純一先生は毎日練習を熱心にみてくれ、グラウンド整備もやってくれていた。

和歌山北高校に入って記録が伸びた。100㍍11秒2、200㍍22秒5、走幅跳7㍍前後、三段跳び15㍍02、走高跳び1㍍80がベスト記録。三段跳の前県高校記録保持者。

沖縄インターハイでは三段跳で4位に入り、総合優勝に貢献した。顧問の吉田克久先生は朝早くから夜遅くまでグラウンドで指導してくれる熱心な先生でした。

16㍍22の県新記録を樹立

日本大学では100㍍10秒77、200㍍22秒2、走幅跳7㍍27まで伸びた。しかし、得意の三段跳びは大学3年間高校の記録を更新できずにいた。そして一番印象に残る試合となったのは大学4年の関東インカレの1本目。イメージ通りの跳躍ができ15㍍67で6位に入賞できた。その後は急速に記録が伸び、日本インカレでは15㍍90を跳び5位に入賞、そして日大競技会では県新記録となる16㍍22を跳んでみせたのである。社会人となっても全日本実業団陸上で4位、5位と入賞を重ねるなど活躍を続けている。

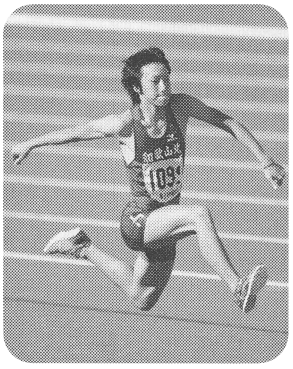
「人間業ではない」競技にほれ込んだ

初めて三段跳を見たとき、「これは人間業とは思えない！人間離れした競技だ！」と絶句したという。

しかし、その競技をいつしか、自分で天命のスポーツと納得していることが不思議だという。日々の練習一つひとつが記録の更新につながっているので、これからも故障、病気なくやるべきことを積み重ねていき、東京オリンピックに挑戦してみたいと思っている。

身長167㎝、体重58.5kg。趣味は散歩。キックボクサーの魔裟斗選手のファンだ。

手平裕士選手
（オークワ）
男子走幅跳　5位　7㍍58



写真は沖縄インターハイ三段跳3位の跳躍

走幅跳7㍍78の県記録保持者

2016年の岩手国体の成年男子走幅跳で追い風2・3㍍の条件下で8㍍00を跳び優勝している。7㍍78の県記録保持者。

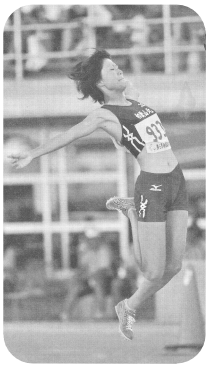
沖縄インターハイでは予選を7㍍34で軽く突破したが、決勝では追い風4.3㍍の中、最下位の6㍍61と不調を極めた。

ところが、総合優勝がかかった三段跳ではチームメートの有松今日選手と共に魂の跳躍を繰り返し、手平選手が3位、有松選手が4位に入賞、みごと和歌山県初の総合優勝を実現した。

後輩の荒木選手にエールを送る

「今年はセカンドベストを出すことができたものの、自分が満足する結果と記録が出せずにシーズンを終えました。全日本実業団では1本目から足を攣ってしまい優勝することができず不甲斐ない結果となりました。来シーズンに向け1から細かいトレーニングを徹底して世界陸上に出場を目標に頑張ります。父が指導している荒木君に私の県高校記録を1㌢更新されましたが、祝福したいと思います。彼は伸び代がたくさんあり、これから大学に行き筋肉の鍛え方や技術などを色々な人から学び、世界で戦うアスリートになって欲しいと思います」。

中尾優里選手
（小島プレス）
女子走幅跳　8位　5㍍80



写真は沖縄インターハイ走幅跳優勝の跳躍

中学・高校・一般の走幅跳県記録保持者

保田中で近畿大会中学1年の部優勝、ジュニア五輪中学1年100㍍の部3位（12秒91）に入賞した。走幅跳5㍍63の県中学記録も作った。和歌山北高校2年生の県大会では100㍍、200㍍、走幅跳、4×100㍍リレー、4×400㍍リレーの5種目で優勝、近畿大会では100㍍11秒87の県新記録を出し2位になった。

この年イタリアで開催された世界ユース陸上に出場し、100㍍で2次予選まで進出、メドレーリレーでは1走を任され、8位に入賞した。奈良インターハイでは走幅跳で県高校新の5㍍86をマーク、5位に入賞した。

3年の近畿大会では200㍍の県記録を24秒71まで更新し、沖縄インターハイは100㍍5位（12秒44）で、走幅跳は6㍍04を跳びみごと優勝を飾った。

走幅跳6㍍09の県記録保持者でもある。

全日本インカレ

北亦将成選手（流通経済大学4年）

男子ハンマー投 7位 61㍍85

身長183㎝、体重100㎏。

湯川中学校で双子の弟の雄成選手と共に陸上部に入った。

最初は走高跳と110㍍ハードルをしていたが、2年生から四種競技を始め1862点で県で8位になった。

中学時代は四種競技の選手

3年生の時に県大会で優勝、近畿大会では2338点を獲得し7位に入賞した。

兄弟で同じ競技をしているのでいつもライバル心を燃やした

中学校時代は岡本浩一先生の方針でオールラウンドの実力を身につけた。100㍍12秒0、200㍍24秒0、砲丸投12㍍30、円盤投35㍍、走幅跳5㍍50、110㍍ハードル16秒3、走高跳1㍍71がベスト記録。

紀央館高校で投てきを開始

紀央館高校では保田豪先生の指導の下、雄成選手と一緒に投てきを始めた。2年生の時の近畿ユース大会で弟の雄成選手は砲丸投で優勝、円盤投でも6位に入ったが、将成選手は入賞ができなかった。今までで一番悔しかった大会だと振り返る。

その後、将成選手はハンマー投に自分の適性を見極め、インターハイ出場を目指して猛練習を開始した。

その成果は3年生の近畿インターハイできちんと出た。

この大会では弟の雄成選手が砲丸投と円盤投で、将成選手がハンマーで6位以内の入賞を果たし、兄弟そろっての全国インターハイ出場が実現した。

将成選手は県大会のあと、右ひざを痛めてしまいピンチに陥っていたが、保田先生のアドバイスを忠実に守って怪我を完治させ、本番では自己新記録を連発、目標の全国大会出場の夢を叶えた。

高校時代のベスト記録は砲丸投13㍍60、ハンマー投げが63㍍94。

大学でハンマー投に特化する

大学ではさらにハンマー投に特化して練習を重ねた。

指導者は74㍍08の日本歴代3位の記録を持つ土井宏明氏。1週間に5日の練習、1日の練習時間は5時間、ウエイトトレーニングは毎日行い、投げ込みは多い日で50本敢行し、普段は平均30本ぐらいだ。

ハンマー投は、１本１本考えながら練習をしなければ記録が伸びない難しい競技である。気合いだけでは空回りする競技である。それだからこそ一層魅力的な種目だと考えている。自分の足りない技術面を克服し、今後も記録を追い求めているつもりだ。

漁野理子選手（早稲田大学2年）

女子走幅跳 ３位　　５㍍９２

多くの先生方のお蔭で伸びてきたと話す

「この大会のために冬季練習を頑張ってきました。初めての対抗戦で得点を獲得でき、チームに少しでも貢献でき、とてもうれしかったし、ほっとしました。」

ベスト記録は県記録にあと5㌢と迫る6㍍04。

全国小学大会3位

兄の影響で太地小学校で陸上クラブに入部。　浦直宏先生から陸上の基礎と楽しさを教わり、100㍍14秒25、走幅跳4㍍72の記録を残し、全国小学生陸上の走幅跳で3位に入賞した。

昼休みも練習した

太地中では泉秀先生の練習メニューをこなし、走幅跳で近畿大会4位に入賞し、記録も5㍍43まで伸びた。

新宮高校時代は宮井貴浩先生と一緒に昼休みにも練習をしたお蔭か、インターハイにも出場できた。わかやま国体にも出場させていただいた。

高校時代のベスト記録は100㍍12秒9、走幅跳5㍍80だった。

大学ではセット走、ビルドアップ、坂練習、サーキットなどが中心。スピードがついたことにより、走幅跳の記録も伸びてきた。補強や細かい技術などは先輩から学んでいる。陸上をしていて楽しい瞬間は「自己ベストが出たとき、つらい練習を終えたとき、チームで応援しているとき」。

一瞬のために長い時間をかける競技

陸上競技について。

「数字として勝ち負けが出る単純なスポーツで、その一瞬のために長い時間をかけて、考え、努力していくという深さ。個人競技でありながら、チームとして団結できる部分があるスポーツ」と答える。座右の銘は「停滞は死滅である」。

目標は6㍍35を跳び、ユニバーシアードに出場すること。身長166㎝。

橋本奈津選手（京都産業大学3年）

女子1500㍍ ２位 4分28秒58

酒井梨々華選手（東京女子体育大学2年）

女子 円盤投　3位　　48㍍89

桑原　翠選手（九州共立大学2年）

女子ハンマー投 ８位 54㍍20

U18日本選手権大会

松本万鈴選手（和歌山北高校2年）

女子走高跳 優勝　1㍍74（県高校新記録）

34年ぶりの県高校新記録

優勝記録の1㍍74は1984年に和歌山北高校の浜口真由美選手が作った県高校記録1㍍73を34年ぶりに更新するものだった。

「日本一を目標に頑張ってきたのでうれしい。近畿大会で5位と同記録の7位になり全国インターハイに行けなかったことのリベンジができたので良かった。

9月の近畿選手権で1㍍70を跳んで2位に入り、調子を上げていった

5位と同記録でインターハイに行けず

怪我をしたり、伸び悩んだことがつらかった。特に近畿インターハイでの悔しさや、1㍍63が続いたことが忘れられず、いつかはトップに立ちたいと思っていた。手平裕紀先生からの『力まないこと』とアドバイスを受け、リラックスして試合に臨めました」。

中学時代は四種競技をやっていた

身長168㎝。小学生の頃は空手をやっていたが、高積中学校から陸上を始めた。

近畿中学総体で女子四種競技の県中学新記録2961点を出し優勝した。全国大会では2895点で見事準優勝、走高跳は1㍍66に成功、6位に入った。

ジュニアオリンピック陸上の走高跳は1㍍64で5位だった。中学時代のベスト記録1㍍70は県中学女子歴代2位にランクされている。

低学年女子４×100㍍リレーの県中学記録（52秒02）保持者でもある。

「意志あるところに道あり」を信じて、全国インターハイで優勝することを目標に練習を続けている。

U20日本選手権大会

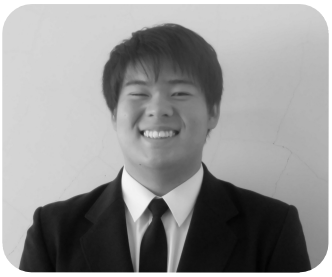
荒木　基選手（和歌山北高校３年）

男子三段跳　6位　15㍍40

全日本中学陸上

小林　聖選手（南部中学３年）

男子砲丸投　3位　14㍍56



近畿中学校総体男子砲丸投で15㍍01の県中学新記録を投げて優勝した。

これまでの記録は2017年大成中学校の井戸良選手が出した14㍍69。

新記録について。「ここ数年県中学記録が1年ごとに更新されているので、僕の記録も来年破られるかもしれない。でも県記録保持者になれてうれしい」。

週に5日の練習を集中してこなしてきた

標準記録を突破したあとは棄権した

昨年のジュニアオリンピックＢ男子砲丸投げで優勝（15㍍42　4.0kg）しており、今年は県記録が確実と注目されていた選手である。

今シーズンは日高選手権で13㍍85を投げ順調に滑り出した。しかし、全国大会予選である通信陸上大会前に右足に肉離れを起こしてしまった。

やむを得ず、通信大会はグライドなしで対応、2投目に13㍍13で標準記録を突破したあとはすべて棄権した。

順位は4位だった。

県中学新で近畿大会優勝

日高地方大会には14㍍14を投げられるまで回復し、県総体では14㍍55まで伸ばして優勝できた。

昨年の全国大会は決勝進出ならず、今年は満を持しての再挑戦だった。

予選は全体の2番目（14㍍99）で通過した。トップは15㍍04だった。

小林選手のベストは近畿大会での15㍍01だったし、練習でコンスタントに15㍍30～40を投げていたので優勝も当然狙える位置にいた。しかし、決勝で15㍍40ぐらい投げたがファールになった頃から力みが出てしまい、14㍍56の記録で3位に終わった。全国3位でも見事な成績だが、本人は「自分の実力が出せなかったので悔いが残る大会だった」と悔しがる。

全国3位でも満足していない

夏休み後半からは顧問の眞砂貴紀先生とマンツーマンで練習に没頭、多い日は100本ぐらい投げ込んだ。そして中学最後の全国大会であるジュニアオリンピックに2年連続で臨んだ。

結果は高校1年生も含まれるＡクラスで14㍍70を投げ5位に入賞した。中学生だけの順位は3位だった。

眞砂先生は「真面目に練習した3年間だった。自宅でも砲丸のビデオを見て研究したりするストイックな態度を貫き、記録を伸ばしてきた。高校でもがんばってほしい」とエールを送っている。

ジュニアオリンピック

大島ブルースリー選手
（城東中学2年）
男子B砲丸投　優勝 15㍍78
（4.0kg）

この種目は昨年南部中学校の小林聖選手が15㍍42で優勝しており、和歌山県勢が2連覇した。

相撲で近畿大会優勝

身長176㎝、体重90kg。
小学生の時、相撲をしていて近畿大会で優勝したこともある。。
城東中に入学して先輩に強く勧誘され砲丸投を始めた。

自宅でもフォームの研究をするなど投てき競技に没頭している

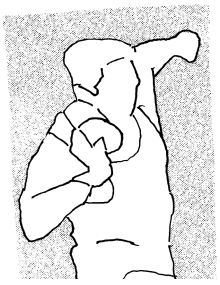
1年の時は11㍍05がベストだったが、もともと相撲で鍛えたパワーと体格があり、真面目に冬季練習をこなした結果、2年生になって大きく記録を伸ばした。
通信陸上では並みいる先輩たちを抑え13㍍98で優勝、全国大会の切符を手にした。

故障で全国大会は惨敗

しかし、その後、左足の靭帯を切って、和歌山市大会を欠場、1カ月半ほど本格的な練習ができなかった。
その間、鉄アレイを使って筋力を鍛えたり、椅子に座ったまま砲丸を投げたりした。練習不十分のまま出場した全国大会は13㍍00だった。
全国大会が終わってからは前岡剛至先生の指導のもと、きつい練習に明け暮れた。本人も「練習をだらけていたらすぐ抜かれるので練習をたくさんしたい。誰にも負けたくない」と負けん気を見せた。

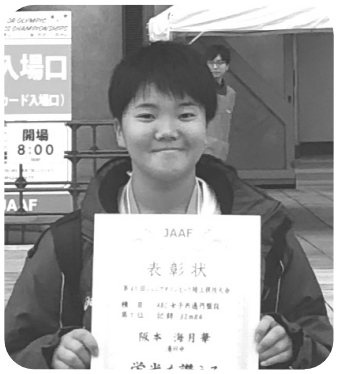
いっぱい食べていっぱい投げろ

自宅では補強やフォームづくりに励んだ。その成果は和歌山市秋季大会で14㍍29、県秋季大会で14㍍09とすぐに出た。



ジュニアオリンピックBでは砲丸の重さが4.0kgと軽くなったが、15㍍78の好記録で優勝した。
前岡先生は「真面目に練習するし、自分でも本などで研究している」「周りの人に応援してもらえる選手になってかつ強くなってほしい」と話す。
大島選手は先生から「いっぱいご飯を食べて、いっぱい砲丸を投げなさい」という助言をいただき、それを守っている。
将来は「20㍍投げてオリンピック選手になりたい」と大きな目標を掲げている。

阪本海月華選手
（湯川中学2年）
女子共通円盤投　7位32㍍84

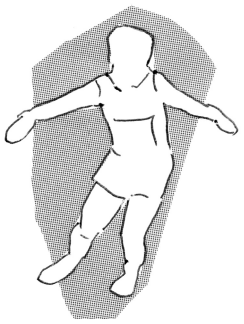


安定した投てきだった

出場選手は47人。
予選は32㍍25で全体の8位で通過し、決勝の6投目に32㍍84を投げ7位に入賞した。
この大会では1回ファールしたものの、すべて31㍍から32㍍台を記録、安定した投てきを見せた。
出場した2年生だけでは3位の成績だった。

1年生から近畿大会に出場した才能あふれる選手である

「周りのみんなが応援してくれたおかげで入賞できたと思っています。とても嬉しかったです」。
湯川小学校の時はスポーツ経験はない。
中学校に入学して岡本浩一先生に勧誘されて陸上部に入った。



2年生で33㍍を連発

身長165㎝。1年生の時、早くも円盤投で郡大会優勝、県大会では25㍍85の記録で3位に入賞し、近畿大会にも出場した。
2年生になり、郡大会で33㍍06の大会新を投げて優勝、県大会でも勝ち、近畿大会では6位に入賞した。
ただその時、2位に入った大阪の選手が同じ2年生で、ジュニアオリンピックの時も負けたのが悔しかった。
練習は週5日、１日2時間ほど行っている。正しい動きができなくて記録が全然伸びない時期があってつらかった。
自分の足りないところは筋力とメンタルの強さだと自覚している。顧問の間野大奈先生が立ててくれる練習メニューを確実に消化して、この課題を克服したいと考えている。

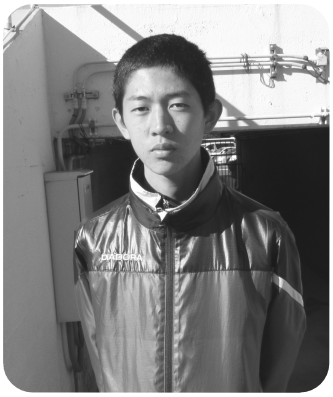
「負ける時は原因がある」

「勝つ時は不思議で勝てるときがあるが、負ける時は不思議はなくて原因が必ずある」と教えられた。
「その通りだと思います。足りない所を補いたいです」。
今年の目標は、近畿大会以上の大きな大会に出場すること、そして最終目標は負けた選手に勝って全国大会で優勝することと話す。

小林　聖選手
（南部中学3年）
男子A砲丸投　５位　14㍍70
（5.0kg）

近畿高校駅伝

野村優作選手
（田辺工業高校3年）
3区（8.1075㌔）区間賞　24分49秒



積極的なレース運びで記録を伸ばしてきた

でも、県駅伝優勝の方がうれしかった

区間賞については「目標にして練習してきたので取れてうれしい」と話した。「でも、県高校駅伝で優勝できたのが一番うれしい」。

12月23日の第69回全国高校駅伝では1区を担当、5㌔まで先頭集団を引っ張る積極的なレースを展開、30分27秒、20位の好位置でタスキをつないだ。

他のメンバーも大健闘し総合27位・2時間09分04秒の好成績を残した。

男子駅伝区間10位

1月の都道府県対抗男子駅伝でも第5区（8.5k㍍）を区間10位の25分10秒で走破し11位に進出、県チーム9位入賞の足掛かりを作った。

身長173㎝、体重49kg。3000㍍4分03秒15、5000㍍14分17秒73、10㌔30分09秒のベスト記録を持つ。

小学校のときはサッカー選手。上秋津中では姉の蒼さんの影響で陸上部に入った。中学校でのベスト記録は1500㍍4分49秒61、3000㍍9分25秒75だったが、高校で大きく記録を伸ばした。近畿インターハイ5000㍍では14分32秒39で6位に入賞した。

尊敬するのは・・・

尊敬する選手は姉の野村蒼さん（神島高校出　現積水化学　3000㍍　9分31秒31）で、尊敬する人物は高校の指導者である藤井歩先生、「誰からも応援してもらえる選手になれ」とアドバイスを受け、油断大敵を肝に銘じている。

全日本実業団陸上

九鬼巧選手（NTN）
男子１００㍍　5位　10秒35

助永仁美選手（オークワ）
女子やり投　5位　52㍍８８
女子円盤投　6位　42㍍６４

田中僚選手（県教育庁）
男子棒高跳　６位　５㍍20

3千㍍障害で日本高校新記録作った人

辻本　智　選手
（白浜中～和歌山工高～神戸製鋼）

近畿インターハイ3千㍍障害の表彰式
日本高校新記録を作って優勝した辻本智選手
（昭和60年　紀三井寺陸上競技場で）

和歌山県の高校生長距離ランナーが日本高校新記録を樹立したことがある。今から34年前の1985年（昭和60年）の6月22日、和歌山で開催された近畿インターハイでのこと。

和歌山工高3年の辻本智選手が9分2秒1の全国高校新記録で見事優勝を飾った。辻本選手は白浜中時代、3千㍍を県内3位の9分34秒で走っている。和歌山工高2年の時には3千㍍障害で9分25秒の県高校新記録を出し、3年での活躍が大いに期待されていた。

しかし、大会の2週間前、体育の授業で捻挫した辻本選手は前日も体調を崩し病院に行く有様。コンディションがどん底の状態で本番を迎えた。

レースがスタートすると体調を考慮し、最後尾に位置取りした辻本選手は、調子が上がってくると、徐々に前の選手を追い抜いていき、ラスト1周で2番手に上がった。バックストレッチの障害物を越したところで前を行く報徳の選手を抜いてトップに立ち、そこから猛烈なスパートをかけて逃げ切った。辻本選手の9分2秒1と2位の選手の9分3秒2が全国高校新記録だった。

この記録は後日、鳥取県の2選手によって5秒塗り替えられたが、その１人が後のバルセロナオリンピックのマラソンで銀メダルを取った森下広一選手（八頭高）だった。

卒業後は神戸製鋼で陸上競技を続け、全日本実業団駅伝や福岡国際マラソンで活躍した。トラックでは第74回日本選手権（平成2年）の5千㍍で13分56秒82を出して6位に入賞している。ベスト記録は日本代表として欧州遠征でマークした13分41秒。

この頃はオリンピックをめざし練習していたが、26歳の時に痛めたアキレス腱が完治せず、ほどなく現役を引退した。

最後に一言こう付け加えている。

「高校日本記録を作れたし、5千㍍で13分41秒で走れました。このことだけですが、お世話になった白浜中の太田先生や和歌山工高の松本先生に少しは恩返しできたのかなと思っています」。

近畿中学総体

水口智貴選手
（近大附属和歌山中学3年）
男子棒高跳　優勝 4㍍10

自己記録を更新してインターハイ出場をめざす

同記録の3位が悔しかった

近畿中学総体の棒高跳で4㍍10を跳び優勝した。

「昨年の大会では3㍍90の同記録で3位になって悔しい思いをしたので今年は絶対優勝するつもりで試合に臨みました。優勝できてうれしい」。

しかし、「記録には満足していませんでした」と話した。

県中学記録を1㎝更新

その1カ月後の記録会で4㍍31の県中学新記録を樹立した。

それまでの記録は井辺敬太選手（近大和歌山中）が2017年に出した4㍍30。

小学校の頃は短距離選手で、4×100㍍リレー（前）県小学記録50秒43のメンバーである。

中学入学後、楽しそうに跳んでいる先輩を見て棒高跳を始めた。棒高跳が専門の北野耕平先生から細かい技術の指導を受け、1年生の時は3㍍00の記録だったが、2年になって4㍍01に急成長。3年生で念願の県中学記録保持者になった。

課題はスピードと筋力

練習は1週間に6日、1日2時間半ほど行っている。助走・踏切・空中動作を一連の動きとしてつながるように気をつけている。空中動作の習得には鉄棒を使っている。

ベスト記録は100㍍12秒08、200㍍24秒51で走幅跳は6㍍00。短距離出身なのに課題はスピードと話し、筋トレも充実したいと思っている。

尊敬する選手は4㍍80の記録を持つ西哲生選手（近大和歌山高出）と5㍍50の県記録保持者の田中僚選手（県教委）。

福島直樹選手
（河北中学1年）
1年男子1500㍍　優勝 4分27秒16

短距離から距離を伸ばしている

「ベスト記録（4分19秒54）ではなかったけど、攻めたレースができて優勝もできたのでうれしい」と話す。

身長170㎝、体重55㎏。楠見小学校時代は野球と陸上をやっていた。

紀の国ＡＣには小学校5年から所属、全国小学生陸上の4×100㍍リレーで優勝、全国小学生クロスカントリーリレー研修大会4位の実績を誇る。

今は800㍍・1500㍍を好んで走っている

800㍍2分15秒64、1000㍍2分54秒43の県小学記録保持者である。

練習メニューは北川雅敏先生、川村栄司先生に自分に合ったように作成してもらい、実施している。体調・体力にあった練習メニューなので少しずつ、しかし、着実に記録は伸びている。

中距離からマラソンまで走れる選手に憧れる

長い距離のペース走が苦手で、もともと短距離選手であったせいか、200㍍を5本のようなスピード練習を好む。

朝練は軽く4㌔程度走っている。

1500㍍の他に800㍍2分07秒96、3000㍍9分36秒46の自己新記録を達成した。

理想とするのはモハメッド・ファラー選手のように中距離からマラソンまでこなせるオールラウンドのランナーになること。

これからもずっと趣味である陸上を続けて、高校では中距離から5000㍍を普通に走れる器用な選手になりたい。

宮本照久選手
（桐蔭中学3年）
男子走幅跳　3位 6㍍77

走幅跳の記録を順調に伸ばしてきている

中学1年から順調に記録を伸ばしている選手である。

今シーズンも6㍍50から少しずつ記録を伸ばしていって9月には6㍍79のベスト記録を出した。

県大会では追い風2.2㍍の中、7㍍01を跳んでいる。

「今シーズンは近畿大会、全国中学陸上、国体という大きな大会に出場することができた。入賞できるベスト記録を持っていたが、実力を発揮することができなくて、近畿大会3位だけに終わってしまった。大舞台で実力を出すことの難しさを改めて痛感した」。

大舞台で実力を発揮する難しさ

川嶋英嗣先生からは「上位入賞することだけが価値あることではない。競技者である前に人として尊敬されるようになりなさい」とアドバイスされたことが印象に残った。

この3年間、川嶋先生から指導を受け、自分でもビデオをチェックしながら練習を続けてきた。体幹がしっかりしていない点、踏み切り直前の動作に課題があることも分かってきた。筋力トレーニングの必要性も感じている。

みんなに抜かれて落ち込んだけど

小学校の時、仲間と4×100㍍リレーで全国大会に出たことがうれしかったし、逆にオスグッドで自分だけが練習ができない間に、みんなに抜かれてしまい、落ち込んだこともあった。しかし、今は高校で100㍍や走幅跳を続けてみたいなぁとは思っている。

好きな言葉は「きょうという日は、残りの人生の最初の１日である」。

小林　聖選手（南部中学3年）

男子 砲丸投 優勝15㍍01
（県中学新記録）

菱山愛里選手（海南中学1年）

1年女子800㍍　優勝
2分19秒63（大会新記録）

通信陸上では上級生を退け優勝を飾った
（写真は近畿大会）

予選を2分24秒00で通過し、決勝では2分19秒63の大会新記録で見事優勝を果たした。

「小学校の頃から負け続けていた県外の選手がランキングトップだったので、今度こそ勝とうと思って走った。優勝できてとてもうれしい」。

お姉さんの影響を受け陸上に興味を覚え、黒江小学校2年生のときから紀の国ＡＣで川村栄司先生らの指導を受けている。

800㍍は2年生の3分25秒から学年を追うごとに記録を伸ばしてきている。

小学校5年生で2分25秒50、6年で2分24秒12の好記録で走った。

全国小学生クロスカントリーリレー研修大会総合4位のメンバーでもある。

行く手を阻むのは壁ではなく扉だと思っている

海南中では田中啓和先生が顧問。身長155㎝。

通信陸上800㍍で1年生ながら2分22秒09の記録で優勝、県大会1年800㍍でも2分21秒49の大会新記録で優勝、近畿大会に向けて弾みをつけていた。記録は9月の海草有田新人大会で2分19秒22まで伸び、ジュニアオリンピックにも出場、女子Ｃ800㍍では準決勝まで進出した。1500㍍では4分54秒97の記録を持っている。

これからはフォームに気をつけてスピード練習を重ね、苦手なビルドアップ走にも積極的に取り組みたいと話す。

目標はまずは全国中学陸上に出場すること。

「自分の行く手を阻んでいるのは壁ではなく扉だ」と思い練習を続けるつもりだ。

三宅愛香選手（楠見中学1年）

1年女子800㍍　3位　2分23秒58

「3位入賞はうれしかったけど、1位、2位の選手と絡めなかったのでまだまだ実力不足です」と気を引き締めている。

走るのが好きだったので、楠見東小学校5年の終わりに紀の国ＡＣに入部し、6年の時に800㍍で2分35秒81、1500㍍5分08秒の記録を残した。

また全国小学生クロスカントリーリレー研修大会にも出場、総合で4位に入賞している。

ライバルたちと競り合って記録を伸ばしている

中学校では伊丹大輔先生の指導を受けている。先生からは「練習の意味を考えながら走るように」とアドバイスを受け、1日1日の練習を大事にすることを忘れないようにしている。

長距離走は日々の練習の積み重ねがそのまま記録に反映される。質のいいトレーニングをすれば速くなるのは分かっているが、インターバル練習がまだまだ苦手だ。

故障で練習できないことがつらいが、それを克服したあと、ベスト記録が出た時の達成感が忘れられない。

大きな試合で勝ちたい

通信陸上では共通800㍍で2分28秒02を出し3位に入った。県大会の1年女子800㍍では大会新の2分22秒46で走り2位となり近畿大会の3位入賞につなげた。

身長160㎝。ライバルたちと競り合いながら記録を伸ばし、全国大会の上位で戦うことを目標にしている。

成川咲菜選手（下津第二中学1年）

1年女子100㍍　2位　12秒83

100㍍、走幅跳、400㍍リレーに出場することが多い

大東小学校時代はダンスをしていたが、先生から勧められ陸上にも興味を持った。

6年生の時、日本ジュニア室内陸上小学女子60㍍で優勝、春には13秒17の県小学新記録も作った。

中学に入ってからも好調が続く。

中学1年で12秒72を出した

通信陸上の1年100㍍を13秒15で制した。県大会も13秒15だったが、近畿大会では予選で12秒79が出た。準決勝も12秒72で勝ち抜け、決勝に進出したのだった。

この他、4×100㍍リレーの県選抜メンバーに選ばれジュニアオリンピックに出場、1走を担当し、48秒93の県中学新記録を樹立した。

「夏の間の練習の成果が出てうれしかった。脚が後ろに流れないように練習した。でも、長い距離を走っていたのに後半の伸びがまだまだ足りない」と自己分析をする。

小学校の時は内田敏夫先生から「１本１本何か１つでもポイントを考えて走らないと速くならない」、藤田純江先生からは「前に出ないと練習している意味がない」とアドバイスされた。

自分では「練習でも試合でも速い人に勝負していかないと速くならない」と考えている。

目標は中学3年生で国体に出ること。

祝　県新記録

橋詰大慧選手（青山学院大学4年）

5000㍍　13分37秒75（県新記録）
10000㍍　28分28秒08（県新記録）

都道府県対抗男子駅伝の3区（8.5㌔）で区間5位の24分21秒で走った

ホクレンディスタンスチャレンジの5千㍍で13分37秒75、1万㍍記録挑戦会で28分28秒08の県新記録を樹立した。

従来の県記録は2015年、瀧滝大記選手（中央学院大学）がマークした5千㍍13分42秒16、1万㍍28分31秒84だった。

橋詰選手は2017年に作ったハーフマラソンの1時間2分46秒と合わせて3種目の県記録保持者となった。

新記録については「大学でハーフの県記録を作るのが目標でしたが、5千㍍・1万㍍の県記録が出たので驚いています」。

スピードでは負けないようにした

5千㍍は青山学院大学の新記録だった。

「同期に強い人ばかりいたので、スピードで全員に勝とうと思って練習した」。

出雲駅伝の1区で区間賞を獲得、チームの優勝に貢献した。初めての出走となった箱根駅伝は1区を任され、トップと6秒差の3位でタスキをつないだ。

今年の都道府県対抗男子駅伝でも和歌山県チームで力走、3区で12人抜きを演じ、総合9位に大いに寄与した。

身長176㎝、体重58kg。小学校時代はバレーボール選手。海南市のマラソン大会で優勝できなかった悔しさから陸上を始めた。

下津第二中学校では3千㍍の県中学新記録、和歌山北高校で1500㍍の県高校新記録を作った。

全国高校駅伝では3年生の時、1区で中継所直前まで競り合い、トップと3秒差の2位、29分42秒で走り切った。大学進学後も順調に記録を伸ばしたが、箱根駅伝には4年になっての初出場となった。

小学校から続けている長距離の魅力については「努力すればその分結果に表れるので努力し甲斐があるところ」。

尊敬する選手は大迫傑選手で、「自分も5千㍍、1万㍍のスピードをもっと高めて、日の丸を背負いたい。

将来はマラソンに挑戦したい気もします。スタミナはまだまだありませんが」と話す。

和歌山県の長距離のレベルを上げるためには「高校生、中学生は県外合宿などを積極的に行い、ライバルを増やすと練習のモチベーションが上がる」とアドバイスをした。

田中信弘選手（アグリズ／藤原農機）

100k㍍走　7時間38分19秒37
（県新記録）

梅栽培の合間に100㌔走の練習をしている田中氏

みなべ町晩稲在住。梅農家。身長177㎝、体重65kg。

高知県で開催された第24回四万十ウルトラマラソンの100㌔の部で1800人中7位に入賞し、自身が持っていた和歌山県記録7時間46分41秒を7時間38分19秒に塗り替えた。

フルマラソンの通過は3時間2分だった。

田中氏のベスト記録は7時間32分14秒であるが、その当時は県記録認定対象外の種目であったため、公認されていない。

上南部中学校から長距離を始めたが、日高高校2年で記録が伸びないため陸上部を退部した。

しかし、走ることが好きだったため、大学では趣味の一環で週に1、2回は走っていた。

卒業後は健康のためもあり、毎日トレーニングを重ねるようになった。そしてスタミナに自信が持てたことで意を決して、第10回東京マラソンに出場、2時間30分57秒の公認記録を出してしまった。

しかし、本人はフルマラソンより長いウルトラマラソンの方がスピードのない自分に合っていると考え、距離を伸ばしていった。

国内最大のサロマ湖ウルトラマラソンは梅の収穫期と重なるため、四万十マラソンだけに的を絞り、2014年から5年連続で出場、毎回入賞を続けている。この他、宮古島ウルトラマラソン大会や木曽三川ウルトラマラソンなど国内有名大会でも安定した成績を残すベテランランナーだ。

練習は梅の収穫が終わった7月頃から本格的に開始する。週に4日の練習。朝4時ごろから練習をする。12㌔を1㌔3分40秒ぐらいのペースで走り、気が向いたときには30㌔、50㌔を㌔4分30秒ぐらいでゆっくり走る。

そんな練習だけでも100㌔完走できるという。スピードよりスタミナを重視した練習なので5千㍍のベスト記録は16分から伸びてこないが、本人は一向に気にしていない。

ただ、日高地方駅伝にみなべ町チームの代表として走る1.8㌔が短すぎると不安になっている。お酒は飲まない、たばこも吸わない、楽しみは1歳の娘さんと遊ぶことと、梅栽培、それと練習したあと、甘いものを食べることだ。

誰も知らないはずなのに

最近気になることは、朝4時から走り始め6時には終わり、農作業に支障のないようにしているのに、周りの人から「梅の世話をしないで走ってばかりいる」と言われることだ。

「新聞配達員しか知らないはずなのにいい加減なことを言う」と苦笑いをする。

田中氏は7時間32分14秒の自己ベストを更新する県記録を出してからウルトラマラソンを卒業したいと話している。

橋本奈津選手（京都産業大学3年）

女子5000㍍　15分47秒34
（県新記録）

12月の日体大記録会で5千㍍15分47秒34の県新記録を樹立した。

従来の記録は2011年に古久保亜衣選手（京都産業大学）が作った15分51秒24。

ベスト記録は1500㍍4分20秒11、3千㍍9分21秒20。

大学では稲原敏弘、伊藤輝雄の両氏の指導を受け、全日本インカレ1500㍍優勝、全日本個人別選手権1500㍍優勝2回、全日本駅伝1区区間賞の輝かしい実績を残している。

故障から復帰し、5千㍍で県新記録を樹立した

田辺市新庄小学校のとき、姉の影響で田辺ACに入部して陸上を開始、800㍍2分38秒78、3㌔10分29秒（ロード）の記録を残した。

中学校の頃は故障がちで目立った記録を出していないが、神島高校に入学後長山丞先生からアドバイスを受け、徐々に調子を取り戻してきた。

全国高校駅伝には2回出走、3年の時は2区で日本人トップにあと4秒と迫る12分59秒の区間5位で快走、14人抜きを演じたことが話題になった。

身長171㎝。5千㍍の県新記録更新については「やっと出たかといったところ。素直にうれしい。記録保持者として自分の名前が載ることが光栄です」

1500㍍はおもしろい

5千㍍よりも全日本インカレ・個人選手権で1500㍍優勝3回など1500㍍の活躍が目立つ。

1500㍍は「レースの駆け引きが好きで、ラスト勝負で成功したときの達成感が他の種目とは違う」と話す。

今後は、1500㍍のスピードを基礎に、故障に気をつけながら距離を伸ばしていってスタミナを養成、全日本インカレ、全日本女子駅伝などの全国レベルの大会での優勝を目指していく。

宮前里帆選手（大阪国際大学4年）

女子100㍍ハードル　13秒66
（県新記録）

これまでの記録は2014年に中谷ほのか選手（中京大）が作った13秒81。

「アップのときからすごく調子が悪く、ベスト記録が出るとは思っていなかった。でも、直前練習で持ち直すことができた。抜き足重視で走ることができたが、13秒66が出るとは思っていなかったので自分でも驚いた」。

身長158㎝。亀川小学校時代は器械体操と水泳を習っていた。

亀川中学校では兄のあとを追って陸上部に入部、最初は男子に交じって走高跳をしていた。

しかし、男子の高さについていけず、雑賀秀和先生からハードルを勧められたのがきっかけだった。

中学時代のベスト記録は100㍍13秒32、走高跳1㍍48、100㍍ハードルは15秒12。

ハードルの記録は毎年更新できている

中学3年の県大会は15秒12のランキングトップだったのに、転倒して5位になった苦い経験を持つ。

和歌山北高校では100㍍12秒92、200㍍26秒42、走高跳1㍍62、100㍍ハードル14秒33まで伸び、近畿インターハイ6位、全国インターハイでは準決勝まで進んだ。

七種競技も面白い

七種競技でも県高校記録にあと34点と迫る歴代2位の4212点を出したこともある。

大学時代は関西インカレ6位ながら、西日本インカレ2位、近畿選手権2位と大きな大会で結果を残した。個人選手権、全日本インカレ、日本選手権にも出場している。

辛かったことは高校時代からずっと故障に悩まされていること。それでも怪我のときを除けば100㍍ハードルの記録は毎年更新している。ハードルの良さは「走力がなくても考え方次第で勝てるところ」。足りない所は「走力とアプローチ、接地技術」。

「これからも競技は続けたいと思っていますが、どうなるかわかりません。ですが、引退試合で悔いが残らないように、七種競技と100㍍ハードルは思う存分やっておきたいと思います」。

桑原翠選手（九州共立大学2年）

女子ハンマー投 58㍍55
（県新記録）

大学2年生歴代5位の記録を出した

アクシデントが怖い

58㍍55は大学2年生日本歴代5位の好記録である。

桑原選手に今シーズンを振り返っていただいた。

2018年シーズンは、まずまずのスタートでした。

2月の所属大学での記録会で予想以上の記録を残すことができました。これは冬季トレーニングの成果が出たのだと思います。

その後順調に仕上がりつつあったのですが、膝を故障したこともあり、6月から立て続けに開催された大きな大会で自分の力を出しきれませんでした。

また、9月の全カレでも調子が上がらず、自分としては不本意な結果でした。

ただ、7月の大学の記録会では自己記録更新の58㍍55を出すことができました。これらの結果から、目標とする大きな大会で結果を残すことができないのは、まだまだ実力が足りないということを改めて自覚することができました。

また、実力をつけるということは、技術を磨くこと以外に、今まで以上に、病気や怪我をしないことと、アクシデントに遭わないように気を付けること、精神的にタフになるよう鍛錬することが大事だということも改めて自覚しました。来シーズンに向けて焦らず着実に進んでいこうと思います。

祝　県高校新記録

酒井梨々華選手（東京女子体育大2年）
女子円盤投 48㍍89（県新記録）

全日本インカレで25年ぶりに円盤投の県記録を更新した

全日本インカレ円盤投で48㍍89 の県新記録で3位に入賞した。従来の記録は1993年に井上弥子選手（筑波大学）が打ち立てた48㍍60。

「去年のインカレでは結果を残せず終わってしまい悔しい思いがあり、今年は絶対に入賞するという目標があったのでそれを達成できたのですごくうれしかった。県記録を全国大会で更新できてよかったです」。

100㍍13秒台で走った

大成中学校で宮西紀行先生、中本徹先生の指導を仰ぎ、円盤投で県大会優勝。走幅跳で県大会3位に入ったこともある。

紀央館高校で保田豪先生に師事。1年の近畿ユースで優勝（37㍍50）、2年の時、春季選手権で40㍍95を投げ、日本ユースで9位に入った。3年生の時は全国インターハイの円盤投で4位に入賞した。高校でのベスト記録は砲丸投10㍍09、円盤投41㍍25、やり投41㍍73、ハンマー投32㍍42。

大学3年生の時、円盤投で関東インカレ2位、日本インカレ個人選手権3位、日本インカレ3位（48㍍89）の成績を残した。

悔しかった試合は和歌山インターハイ。たった2㌢差で3位入賞を逃してしまった。

投てきは面白い

「投てきは練習すればするほど伸びる競技です。円盤投は自分の体の動かし方を知らないと難しい種目ですが、遠くへ飛んだ時や、きれいに飛んでくれた時はうれしくなるし、楽しくなる種目です。投げ込みをする時も試合を想定して１本１本集中して投げています。大学では投てき選手にも大きな声援が送られます。入賞すると自分のことのように喜んでくれます」。

指導者に感謝

指導者には恵まれたと話す。中学時代の宮西先生は陸上のことは何でも教えてくれたし、中本徹先生は投てき以外の種目も積極的にするように仕向けてくれた。

高校時代の保田豪先生は円盤投の技術を1から教えてくださいました。尊敬する人です。先生から教わったことが全て自分の競技や人生に影響を受けていると思います。感謝しきれないぐらい感謝しています。

大学時代の佐々木大志先生からは自分の投げを信じてくれて、練習では的確に教えていただいています。

先生方から学んだこと、「努力は裏切らない」・「勇往邁進」を自分の信条にして、今後は日本選手権入賞・全日本インカレ優勝、56㍍を投げることを目標にしています。

都築勇貴選手（田辺工業高校3年）
男子1500㍍　3分50秒62
（県高校新記録）

自分らしさを貫くレース運びが身上だ

近畿インターハイで1500㍍3分50秒89の県高校新記録を樹立、見事優勝した。全国インターハイではその記録を3分50秒62まで伸ばした。

従来の記録は2015年に桐蔭高校の有松憧選手が持っていた3分51秒17。

800㍍1分56秒52、5千㍍14分21秒99、10㌔30分12秒のベスト記録を持っている。

県高校駅伝では3区を24分34秒で走り、初優勝への流れを作り、全国高校駅伝でも同区を24分26秒の区間14位で激走、チームの27位、2時間9分04秒に貢献した。

小学校時代は合気道、上芳養中学校では野球をやっていたが、マラソン大会などで長距離走が面白くなり、田辺工業高校では陸上部に入った。

スピードとスタミナが備わったランナーだ

才能は1年生のときから開花し、1500㍍4分01秒91、5千㍍14分55秒46の記録をマークした。

その後も同級生の野村優作選手、重石卓哉選手らと競り合いながら記録を順調に伸ばしていった。

1月の都道府県対抗男子駅伝でも積極的なレース運びをして総合9位の下地を作った。

身長178㎝、体重60㎏。

中学時代の西野勝貴先生からは「試合の１つひとつを楽しみなさい。気楽に走ればいい」という言葉をかけられリラックスできたし、高校では藤井歩先生からは「ただ走るだけの選手になるな。それは簡単なこと。いつも人間性を磨き、周りからも応援してもらえる人間になりなさい」と常々指導されてきた。どんな練習でもその意味を考え、真面目に取り組むようにしている。

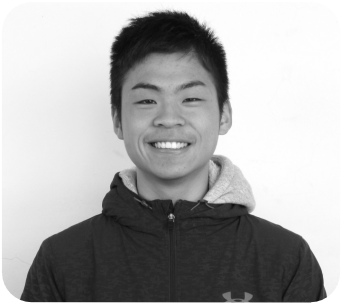
荒木　基選手（和歌山北高校3年）

男子２００㍍	21秒36	（県高校新記録）
男子走幅跳	7㍍41	（県高校新記録）
男子三段跳	16㍍04	（県高校新記録）

松本万鈴選手（和歌山北高校2年）
女子走高跳 1㍍74（県高校新記録）

祝 県中学新記録

長岡佳希選手（明和中学3年）
男子110㍍ハードル　14秒57
（県中学新記録）



「中学の先輩の記録を破ったのでいい思い出になります」

和歌山市陸協記録会で110㍍ハードル14秒57の県中学新記録を樹立した。

従来の記録は2011年に明和中学の先輩、玉置将吾選手が作った14秒65。

空手の猛者

身長178㎝、体重70kg。

名草小学校の頃はバスケットボールと新極真空手をやっていて、空手の方は県大会で優勝を重ねる猛者。

明和中学校入学後は空手に生かせる体力をつけるために陸上部に入った。

1年の頃は短距離をしていたが、2年からは四種競技を視野に入れ、110㍍ハードルの練習を始めた。

朝練にも参加し、週に6日、1日2時間の練習に取り組んだ。帰宅後も自分なりの体幹補強を続けた。

ライバルたちと競り合った

試合のたびにライバルたちと競り合った結果、記録は16秒42から15秒41まで伸びた。3年になってからは14秒台を安定して出せるようになり、9月についに県中学新記録を出した。

「ハードルを始めてから県中学記録を出すことを目標にしていたのでうれしかった。日ごろから練習を積み重ねていけばいい結果が出ることがわかった。今までお世話になった先生方のお蔭だと思います」。

先生方からの助言

芝裕二先生からは「自信を持て」、雑賀秀和先生からは「第一ハードルから思い切り行け」、下田瑛先生からは「練習で何回もやったからその通りすればいい」と励まされた。時折、部員のお父さんから指導をしていただいている。

印象に残る試合は14秒75で走って、全国大会標準記録を突破した7月の通信陸上だ。

全国大会やジュニアオリンピックでは予選落ちだったが、全国レベルを肌で感じることができたことは自分の財産になった。

雑賀先生は「生徒会長もやり、何でも前向きに考える生徒。これからの伸びが楽しみ」と話す。

本人は高校ではハードルで県高校新記録を更新したいと思っている。

山本心葉選手（貴志中学3年）
女子100㍍　12秒36
（県中学新記録）

1年の時、13秒93だった選手が、3年になり12秒36の県中学新記録を作った

2種目で県中学新

7月の県大会、中学女子100㍍で12秒37、8月の近畿大会で12秒36の県中学新記録を立て続けて樹立した。

従来の記録は2017年堂西愛加選手（紀之川中）が出した12秒40。

「大会前はすごく調子が良く、県記録が出たときはとてもうれしかったです。もっともっと速くなりたいという気持ちも湧いてきました」。

200㍍26秒2、4×100㍍リレーは貴志中チームで50秒08、県選抜チームで48秒93（県中学新）の記録も持っている。

近畿大会100㍍は7位。全国大会へは100㍍と4×100㍍リレーで出場した。

身長158㎝。貴志小学校では水泳をしていたが、走るのが好きだったので中学で陸上部に入った。

しかし、中学1年の夏には追い風の時でも15秒を切れず、秋に14秒5、3月になってやっと13秒93を出せる選手だった。

家族もコーチに

そんな山本選手が3年生で12秒36の県中学記録を作ったことについては本人が1番驚いている。1週間に6日、1日2～3時間の練習、夏の朝練習などを真面目にこなしてきた結果だろうが、本人は、家族の協力が大きかったと話す

試合の時はアップの時から付き添ってくれたり、応援してくれたり、自主トレのときも見守ってくれた家族に感謝している。

100㍍は、短い距離で腕振り、腿上げなど、どれだけ自分が意識して走れるかによって記録が左右されるし、練習すればするほど結果がついてくる点にあるから好んで走っている。

堂本颯斗選手（古佐田丘中学3年）
男子８００㍍　１分57秒５１
（県中学新記録）

水口智貴選手（近大和歌山中学3年）
男子棒高跳　４㍍31
（県中学新記録）

小林　聖選手（南部中学3年）
男子砲丸投　15㍍01
（県中学新記録）

女子低学年　4×100㍍リレー

東和中学校　51秒28
（県中学校新記録）

長澤真生選手（2年）川端美珠生選手（1年）
南方麻央選手（1年）上野山真白選手（2年）

3年ぶりに県中学新記録樹立の東和中チーム

2015年に高積中学校（岡本祐衣　稲谷凪紗　中村紗也　松本万鈴）が出した52秒02を、県中学校秋季大会で更新した。4人とも指導者の雑賀秀和先生、清水歩先生からの「１つひとつの練習を大切にするように」とのアドバイスを守ったから達成できた県新記録だと口をそろえる。

1走　長澤真生選手（2年）

宮前小学校卒。100㍍のベスト記録は14秒02。放送で新記録を知ってとてもうれしかった。記録が伸びず落ち込んだこともあったが、瞬発力、特に腕や足の回転を速くすることを心掛けたら調子が上がってきた。「自分に負ける者は誰にも勝てない」と思っている。これからはリレーで50秒を切ることと、個人種目で少しでも記録を伸ばしたい。

2走　川端美珠生選手（1年）

宮前小学校卒。100㍍のベスト記録は13秒39。バトン練習などみんなで懸命に練習してきた成果が出てうれしかった。まだまだ出るタイミングが遅いので改良したい。県大会では200㍍で2位。早起きするのが苦手だけど、200㍍の自己記録27秒58を更新して優勝できるように朝も練習します。走るのが楽しくたくさん友達もできました。

3走　南方麻央選手（1年）

父親が陸上クラブのコーチだったので走り始めた。宮前小学校の時、80㍍ハードルで全国10位。ベスト記録は100㍍13秒42、100㍍ハードル15秒94。小学校の時から同じ仲間で走ってきたので新記録を出せると思っていた。目標は100㍍ハードルで県中学新記録を出すことと全国大会、ジュニアオリンピックに出ること。

4走　上野山真白選手（2年）

宮前小学校のとき、全国大会に出場の経験あり。

ベスト記録は100㍍12秒70、200㍍26秒02、100㍍ハードル15秒23。県新記録が目標だったので達成できたときとてもうれしかった。ジュニアオリンピック100㍍2年連続出場。中一の冬に足を骨折、半年走れなかったので、練習の後、ストレッチとアイシングをしている。ライバルに勝ちたい。

女子　4×100㍍リレー

県選抜チーム　48秒93
（県中学校新記録）

成川咲菜選手（1年）上野山真白選手（2年）
藤木志保選手（2年）山本心葉選手　（3年）

7年ぶりに県中学新記録を作った県選抜チーム

ジュニアオリンピックで県選抜チームが予選で48秒93、準決勝で48秒96の県中学新記録を作った。オーダーは成川咲菜・上野山真白・藤木志保・山本心葉の各選手。従来の県記録は2011年に県選抜チーム（宮﨑さくら・宮本美智留・東山真悠子・森本名美）がジュニアオリンピックで出した49秒29。

1走　成川咲菜（下津第二中1年）

「和歌山県代表に入れ、しかも県新記録。リレーメンバーの思いが結果につながってとてもうれしい」。大東小のとき、先生に勧められて陸上を始めた。紀の国ＡＣにも入部。大阪室内陸上60㍍で優勝、100㍍13秒17の県小学記録を作った。中学校での100㍍のベスト記録は12秒72。走幅跳5㍍15の記録もある。近畿大会1年100㍍2位。

2走　上野山真白（東和中2年）

宮前小学校のとき、2年連続で全国大会に出場。中1の冬に足を骨折、6カ月のブランクのあと、100㍍のベスト記録12秒70を出す。「低学年と共通のリレー2種目の県記録を出せてうれしい」。四種競技では2279点をとり県ランキング1位。100㍍ハードルで15秒22の記録を持っている。ジュニアオリンピックには中一、中二と連続出場している。

3走　藤木志保（桐蔭中2年）

福島小学校時代、和歌山陸上クラブに所属、5年、6年と全国大会に出場。「バトンパスがうまくいって新記録が出た。驚いたけど、最高にうれしかった。」100㍍のベスト記録は12秒55。200㍍26秒98．ラップの芯を使って腕振りの練習をするなど工夫をした。来年度も県新記録を出してみたい。近畿大会・全国大会出場という貴重な体験ができうれしい。100㍍で11秒台を目指している。

4走　山本心葉（貴志中3年）。

貴志小学校では陸上経験はない。中学1年の頃は100㍍14秒5ぐらいの選手で県大会で入賞していないが、学年が進むにつれて順調に記録を伸ばし、3年で12秒36の県中学記録保持者になった。「100㍍とリレーで県新記録が出てとてもうれしいです」。中一の頃は記録が伸びなかったけど、自分を信じて練習を続けていれば、記録は伸びると分かった。11秒台を出してみたい。

祝　県小学新記録

福島直樹選手（紀の国AC）
男子1000㍍　2分54秒43
（県小学新記録）

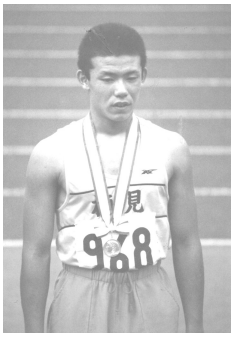
成川咲菜選手（紀の国AC）
女子100㍍　13秒17
（県小学新記録）

知ってるつもり？

100m3年連続日本一

中学陸上で不滅の業績

佐藤寛員選手
（楠見中学3年）



全国大会100㍍3連覇の表彰式

全日本中学陸上選手権大会において同一種目で3年連続優勝を成し遂げた選手が和歌山県にいる。

佐藤寛員氏（当時　楠見中学校　現　和歌山工業高校教員）がその人。

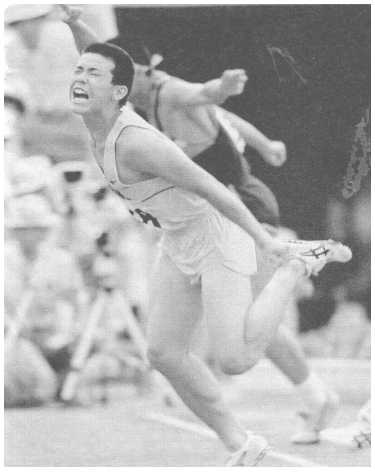
第12回大会（昭和60年　北海道）の中学1年100㍍で優勝（11秒88）、第13回大会（昭和61年　東京）の中学2年100㍍で優勝（11秒38）、第13回大会（昭和62年　三重）の中学3年100㍍で優勝（11秒13）。

男子では史上初

男子では同一種目の3連覇は史上初の偉業であった。中学3年の時は、前日の200㍍決勝で3位になって100㍍の3連覇が心配されたが、100㍍決勝になると、向かい風1.7㍍を物ともせず中盤からトップに立ち逃げ切った。

当時の体格は身長171㎝、体重69㎏。3連覇のプレッシャーについては「周囲から何かとささやかれましたが、自分なりのレースで3年間を締め括ろうと思っていました。勝てて一番うれしいです」。

中学期は人生で最も急激な成長期だから、いつどこでどんな選手が現れるか分からないし、自分も全国大会に3回ともピークを持ってこれる保証はどこにもない。2連覇、3連覇とささやかれる中でプレッシャーにも打ち勝った精神力、調整力にただただ感心する。



全国大会100㍍3連覇の瞬間
中間からトップに立ち、逃げ切った

決勝は経験の差が出た

佐藤選手は8月の近畿大会で全国中学タイ記録の10秒6で走り、自信を持って全国大会に臨んでいた。

前日の200㍍は3位になったとは言え、準決勝では県中学新の21秒98で走った。

本命の100㍍も予選でただ１人10秒台（10秒96）を出していよいよ3連覇は確実と思われたが、準決勝では3番目の記録しか出せなかった。

しかし、それは佐藤氏の時だけ、向かい風が強かった（－1.8㍍）せいで、決勝では格の違いを見せつけ、偉業を達成した。

女子では中野麻由美選手（御代田中）が第4回大会（昭和52年）から第6回大会（昭和54年）まで100㍍で3年連続優勝している。

楠見小学校時代はバスケットボール部に所属しながら、陸上の大会にも出場、100㍍12秒5の県小学記録を樹立したこともある。楠見中では大谷貞夫先生に勧誘されて陸上部に入った。大谷先生には段階的に鍛えられ順調に記録が伸びたし、全国各地の試合に連れていっていただき、勝つ楽しさを知った。

中学時代に出した県中学記録100㍍10秒87、200㍍21秒98は2018年までの31年間破られていない。

和歌山北高校時代は中谷隆哉先生に指導を仰ぎ、高校3年生の時には日本選手権で5位入賞（10秒62）、全日本ジュニア選抜陸上100㍍で優勝を果たした。

近畿インターハイの優勝記録10秒46は高校の後輩である九鬼巧選手が10秒34に塗り替えるまでの19年間大会記録として残った。その九鬼選手の記録は桐生祥秀によって書き替えられた。

高校3年のインターハイでは優勝も狙えたが世界ジュニア陸上を優先して欠場した。全日本ジュニアは10秒49で優勝している。高校でのベスト記録100㍍10秒4、200㍍21秒4は県高校新記録（当時）だった。

指導者としても花開く

筑波大学卒業後は和歌山高校（2年）・熊野高校（6年）・和歌山工高（16年）で教職に就き、陸上部の顧問も務めている。今まで教わった大谷貞夫先生・中谷隆哉先生・宮下憲先生は全員ハードルが専門の先生だったため、生徒の指導ではハードルやジャンプを採り入れた補強がどうしても多くなるらしい。

朝練も放課後練習も一人で指導しているが、これまで星畑朗人（400㍍）、宮崎慧二（ハンマー投）、中本地洋（円盤投）などの県高校記録保持者や、三段跳で活躍した矢野佑馬、南出拓真ら多くの優秀選手が育っている。

「名選手必ずしも名監督ではない」と言われることが多いが佐藤氏の場合は当てはまらないことを付け加えたい。

小・中・高・一般の県記録樹立

ハードルの矢野優子選手

（潮岬陸上クラブ所属）

女子ハードルの県小学記録、中学記録、高校記録、県記録をすべて樹立した選手がいる。

矢野優子選手（串本小～串本中～串本高～大体大）である。

2001年（平成13年）、矢野選手は串本小学6年生の時、第17回全国小学生陸上競技交流大会の80㍍ハードルで12秒92の県小学新記録を出して優勝した。

串本中1年の時はジュニアオリンピックＤクラス100㍍ハードルで優勝した。2年生になり、15秒00の県中学新を通信陸上で出し、3年生の全日本中学選手権ではその記録を14秒65まで伸ばして7位に入賞した。

そして、2005年（平成17年）、串本高校1年の県インターハイで14秒48の県記録保持者となった。この記録は1970年（昭和45年）に大阪体育大学の藤岡芳子選手（和歌山北高卒）が出した手動計時14秒7を実に35年ぶりに更新する快挙だった。矢野選手はこの年の岡山国体でも4位に入り、高校卒業後も大阪体育大学で活躍した。

矢野選手は小学校から高校卒業まで潮岬陸上クラブ監督の久保浩子先生の指導を受けている。

最近、市町村対抗ジュニア駅伝で快進撃を続けている串本町の監督を務める方だ。その久保先生に矢野選手との思い出を綴っていただいた。

第17回全国小学生陸上交流大会80㍍ハードルで優勝した矢野優子選手。2位以下を1秒以上引き離す圧勝だった

「矢野優子ちゃんとの思い出」

潮岬陸上クラブ
監督　久保　浩子

お姉さんについてきた

幼稚園のとき、姉の練習についてやってきた。

姉の幅跳びの練習を見ていた矢野は「脚を伸ばして跳ぶ」との説明を頭に入れていたのか、初めて跳んだ幅跳びは脚をまっすぐ伸ばし、そのままドンと着地し、みんなの笑いを誘ったが、私は全国大会で活躍する子だと思った。

大事に育てなければいけないと思い、いろいろな練習を取り入れた。

ミニハードル・金網を持っての足伸ばし・足振り・壁倒立・変形スタート・腕振り・お尻を意識しての歩き・片足立ち・バランス・冬期は山道・砂浜・砂利の浜など自身の身体を使っての体幹強化などを指導した。

試合慣れさせた

メンタル面を強くするため、地方の大会を含め、数多くの試合に出た。

初めての県外試合は奈良だった。

ハードルは本格的には5年生から始めたが、クラブの6年生が専門にハードルをやっていたので少し前から一緒に跳んでいた。

5年生で挫折を体験

5年生で全国大会の出場が決まり、強化合宿に参加、また近畿小学校陸上交流大会に出場し優勝。メンタル面も大丈夫と思ったが、そうではなく、5年生の全国大会は予選敗退だった。私の前での大泣きは初めてで「ベストを出せなかった。来年は頑張る」と誓った。

5年生の11月5日、5府県交流大会で100㍍優勝、80㍍ハードルは10位だった。

6年生になり、春季合宿に参加、その頃から和歌山県大会は100㍍にしようか、80㍍ハードルにしようかと悩んだが、本人に任せた。

結果、ハードルで出場すると決めてからが大変だった。矢野の言葉を借りると「私の長所は不器用なところ」と言うように、きちんとハードルが越えられるように基本動作や、歩きながらのハードリング練習に時間を割いた。

柔軟性はあったが、さらに強化した。

「ハードリングよし」と確信してからどれ位で走るのか気になり、田辺のスポーツセンターまでタイムを取りに行った。

練習中だった太田先生に計測をお願いした。

「13秒5」だった。

記録に驚き、「うそ」と思ったのでもう一度計測、2度目も「13秒5」だった。

初めての全国優勝

全国大会で3回走ることを目標に県大会の出場を決めたが、女子の出場は1人で、受付と同時に全国大会が決定した。

1人だったが、男子よりタイムは良かった。全国大会前の近畿大会の80㍍ハードルで優勝できた。全国大会は2回目とあって「国立競技場は走りやすい」と言っていた。

「ハードリングは一番上手いね」と他の先生のお誉

めの言葉も頂いた。予選は1位、準決勝も1位で通過、決勝も1位で優勝を果たした。ここでの記録12秒83が小学校の県記録になった。

中1で壁にぶつかる

中学生になり、ハードルの難しさを改めて感じた。インターバルが50㌢長く、ハードルも6㌢高くなった。壁にぶつかる度にどんな困難にも打ち勝ってきたが、中１の県大会での壁は厚かった。

普段の練習は土の上でするため、紀三井寺競技場ではスピードが上がり、10台目が詰まってしまった。

初めてハードルで失敗し、近畿大会出場を逃してしまった。その後、出場する大会はほとんど、どん底だった。

ジュニアオリンピックまで壊れたメンタルを元に戻すことが私の課題となった。

体力的には問題なし。いろいろ試しみたがうまくいかなかった。

じっくり考えた末、ジュニアオリンピックまで期間があることに着目、1日1本ないし、2本跳ぶだけに抑えて、ジュニアオリンピックの日がトータルで100本目になるように質を高める練習に転換した。

そして、ジュニアオリンピックのＤクラス100㍍ハードルで15秒01を出して優勝することがでできた。

県中学新を出す

中学2年の時、通信陸上で15秒00の県中学新記録・大会新記録を出し優勝。

矢野はこれまで近畿大会以上の大きな大会が好きで実力を発揮してきた。しかし、中学3年の県大会と近畿大会が和歌山だったので今までにない緊張感が顔に出ていた。

私は矢野を落ち着かせた。そしてどうにか優勝できた。

近畿大会は14秒82で優勝、全国大会では14秒65を出し7位に入った。県中学校新記録だった。

高校入学と同時にハードルは一段と難しさを増してきた。

「ハードルが一番難しいね。小・中・高とハードル間も高さも違ってくるから苦労するね」とよく言った。

少しの間、私の都合もあり、ハードルを跳ばず、短距離の練習を多くした。小中学時代は練習会場までの道のりを歩いていたが、高校から自転車になった。

高校用ハードルが跳べるようにハードリングの確認、スピードの強化、身体のバランス、体幹などを再度見直した。

県記録を樹立

1年の県インターハイの100㍍ハードル。

14秒48の県記録・県高校新記録で優勝できた。

それまでの県記録の14秒87を2年ぶりに更新し、手動の県記録14秒7をも37年ぶりに上回った。

この時、矢野は小学校、中学校、高校の県記録保持者になった。

近畿インターハイでは14秒73で2位に入り、全国インターハイの出場を決めた。国体ではハードルの高さが違ったが14秒37、14秒15の記録を残した。

他にもたくさんの試合に出場した。試合と同じ条件を体験させるためにタータントラックを求め、田辺・和歌山・橋本まで出かけたこともある。

正直、大変だったが矢野は私の人生の1ページを飾ってくれた選手である。感謝している。

人見絹枝に唯一勝った日本人は和歌山の少女だった

日本人女性で初のメダリストの人見絹枝選手

人見選手に二度に渡り苦杯をなめさせた橋本静子選手

古い話で申し訳ないが、1982年（昭和57年）ＮＨＫ連続小説テレビ「よーいどん」を観ていた。

平均視聴率38.8％で今年の大河ドラマ「いだてん」を遥かに超える人気があった。

主人公の少女は天才ランナーで、目標とする選手は人見絹枝だった。

人見と言えば、日本人女性初のオリンピックメダリストで100m、200m、走幅跳の元世界記録保持者である。

このヒロインと同じように昭和の初期、人見に追いつき、追い越そうと練習していた少女が和歌山にいた。

日方高女（現在の海南高校）の橋本静子である。

人見は実質1923年（大正12年）から1930年（昭和5年）までの7年間、国内の公式試合では連戦連勝をし続けた。

ただし、2回だけ負けたことがある。それも同じ選手に。それが橋本静子だったのである。

橋本は1927年（昭和2年）5月21日、第4回日本女子オリンピック大会（美吉野運動場）での50㍍で6秒8の記録で人見を下している。

2回目は1928年（昭和3年）10月13日の第7回大阪市陸上競技選手権大会での100㍍。13秒2で人見を退けた。

橋本はスタートの名手と呼ばれてライバルから一目置かれていた。短距離が得意だが、他の種目でも日本のトップクラスの実力を披露していた。

1926年（昭和元年）の明治神宮大会では50㍍と三段跳で優勝している。三段跳の11㍍16は、数年後人見に抜かれるまでは日本新記録であった。

1928年（昭和3年）の日本選手権では4×50㍍リレーと4×100㍍リレーで優勝、走幅跳でも2位になるなど、「和歌山の人見絹枝」と呼ばれるほどの活躍をしていた。

人見は講演会・講習会で何度も和歌山県を訪問しており、県民にとってなじみのあるアスリートであった。

男子駅伝、感動の9位

みんな驚き、拍手した

テレビ観戦をしていた和歌山県民、いや他のチームの関係者も驚いたに違いない。実際、放送終了後「よくやった」、「目を疑った。鳥肌が立った」、「いつから和歌山県のレベルが上がったんだ」、「メンバー全員が調子よかったんだな。こんなことは滅多にないことだ」といった声が巷で聞かれた。

第24回全国都道府県対抗男子駅伝が1月20日（日）広島県の平和記念公園前を発着点に7区間48.0㌔のコースで開催され、和歌山県チームが順位・記録とも過去最高の9位・2時間21分29秒を達成した。

過去最高順位は第4回大会の26位、記録は第19回大会の2時間23分16秒だった。

今回は順位を17位、記録を1分47秒も更新した。

昨年は38位、記録は2時間26分21秒だった。

レース後、県人会の皆さん、指導者の先生方とともに記念写真に収まる

好位置でスタートした

1区（7.0㌔）の都築勇貴選手（田辺工3年）はスタート直後からチームの活躍を期待させる積極的な走りで集団を引っ張った。途中でいったん、後方に退いたが、後半から勝負をかけ、先頭を十分視野にとらえる20分55秒の26位でタスキをつないだ。

2区（3.0㌔）を任された植阪嶺児選手（古佐田丘中2年）は区間32位で順位を2つ下げたが、タイムは9分07秒と上位とはそれほど差が開かなかった。

3区（8.5㌔）の橋詰大慧選手（青山学院大学4年　和歌山北高校卒）は各種大学駅伝で大活躍をした選手で、5千㍍13分37秒75・1万㍍28分28秒08のベスト記録を持つた学生長距離界のトップ選手。区間5位の24分21秒で順位を28位から16位まで押し上げた。

4区（5.0㌔）では、和歌山北高校2年の家吉新大選手が区間9位（14分39秒）の走りで4人を抜き12位、5区（8.5㌔）の野村優作選手（田辺工3年）は区間10位（25分10秒）で競り合い、１人を抜いて11位につけた。

6区（3.0㌔）の異中学校2年の伊藤凛々斗選手は区間24位だったが、9分03秒と粘り14位でタスキをアンカーに渡した。

アンカーでキャプテンの愛知製鋼の寺内將人選手（和歌山北高校卒）が1万㍍28分15秒56の実力を発揮、ゴール前でも一人でも抜こうとする懸命の力走を見せ5人を抜いて9位でゴールした。

藤井歩監督は「和歌山の歴史を変える走りをすることを目標にしていました。ブレーキがなかったと言われますが、区間順位、区間タイムを指すのかどうか分かりませんが、私はそれよりも気持ちの上でブレーキがなかったのが良かったと思っています。特に1区の都築は大きなプレッシャーがありましたが、自分らしいレースをしてくれました。上位が見える位置でタスキを渡してくれたので、あとの選手が前に進めました。選手には熱心な指導者がついておられます。先生方の思いが選手に伝わって好結果を生んだと考えています。

控えで準備してくれていた山根昴希（帝京大）、折口雄紀（智辯高）、久保亮太（大成中）のみなさん、スタッフのみなさんありがとうございました」と話した。

前理事長で、長らく和歌山県の代表チームの監督を務めてこられた南正晃副会長は次のようなコメントを寄せている。

「人口100万人以下の県は和歌山県を含め、全国で9県あります。

この9県は長距離がそれほど強くないと言われてきました。

3区の橋詰選手が12人抜いて16位で家吉選手にタスキリレー

そんな和歌山県が、長距離・駅伝のレベルが全国1と呼ばれる近畿地区で一番早くゴールしました。

よくぞやってくれたと思います。県教育委員会からスポーツ課川口副課長や県体育協会職員、和歌山陸協から南正晃、川村栄司副会長、山本宜史専務理事、強化部の駅伝スタッフや選手の所属する学校の校長先生、選手の家族等、県内から大勢応援に駆けつけていただきました。また、広島県人会の方々がのぼりを持って熱い応援をしてくださいました。

藤井歩監督（田辺工業高等学校教諭）、芝大輔コーチ（和歌山さくら支援学校教諭）、入学遼治コーチ（和歌山大学教育学部附属特別支援学校教諭）、後藤和樹コーチ（新庄中学校教諭）、支援コーチの方々のご指導に感謝いたします。また市長様を始め各方面からも祝福のお電話、メッセージを頂戴した。本当にありがとうございました」。

知ってるつもり？
女子駅伝、

1区の橋本奈津選手が19位で山本明日香にタスキを渡した

第1回から第6回までの本県チームは23位、9位、24位、5位、7位、11位と上位争いに加わり、この頃が黄金期だったと呼ばれ、その後長い間、中位から下位に甘んじていた。　しかし、平成31年1月13日に開催された第37回大会では一般・大学生の活躍もあり、黄金期に次ぐ活躍を見せてくれた。

男子の活躍の陰に隠れてしまった感があるが男子にも引けをとらない結果を残していたのをご存じだろうか。

1区（7.0㌔）は橋本奈津選手（神島高→京産大3年）が担当。

橋本選手は全日本大学陸上1500㍍で2回優勝し、大学駅伝でも区間賞をとっているスピードとスタミナを兼ね備えたランナー。

昨年、5000㍍で15分47秒34の県新記録を作っている。

19位（20分16秒）で2区（4.0㌔）の山本明日香選手（神島高→大芸大3年）にリレー。

女子駅伝チームの活躍を知っている人が少ないのが残念だ（駅伝壮行会での集合写真）

過去31年間で最高の順位

全37回の大会で5番目の総合タイムでゴールした永岡真衣選手（シスメックス）

5区（4. 1075㌔）の鈴木杏奈選手（和歌山北高2年）は3千㍍を10分04秒で走る選手。14分26秒（区間順位30位）で18位と踏ん張った。

6区（4.0875㌔）は5千㍍16分20秒42の鹿嶋栞名選手（佛教大4年）。

13分50秒（区間順位34位）で25位。

7区（4.0㌔）の原幸日（日高高2年）は3千㍍10分09秒、ハーフマラソン1時間20分台の記録を持っている。13分18秒（区間順位22位）で24位に。

8区（3.0㌔）の大江咲歩選手（田辺中2年）は3千㍍を10分14秒で走れる選手。

10分50秒（区間順位28位）で順位は24位のままだった。

9区（10.0㌔）の永岡真衣（笠田高→シスメックス）は5千㍍15分51秒49、１万㍍32分57秒15（県記録）、フルマラソン（2時間41分15秒）を持つトップランナー。

区間28位（33分48秒）で追い上げ、23位でゴールした。

総合順位の23位は過去31年間で一番早い成績で、女子駅伝37年の歴史（男子は24年）でも5番目に入る素晴らしい成績だった。

総合タイム2時間23分00秒は37年間で4番目にランクインする好記録であった。

37年の歴史で4番目に速い記録

山本選手はフルマラソンを2時間43分21秒で走れる練習量が豊富なランナーである。

神島高校のチームメートだった橋本選手からタスキを受け取り、区間21位の13分18秒のタイム・19位のまま3区（3.0㌔）に中継。

上畑真由選手（大成中2年）は3千㍍9分40秒97、5千㍍16分44秒10の自己ベストを持つ選手。最初から突っ込んで走り、3.0㌔を9分33秒（区間10位）で駆け抜け、7人を抜いて14位まで順位を上げた。

4区（4.0㌔）の小倉稜央選手（和歌山北高2年）は故障で悩まされたが、3千㍍9分27秒のベスト記録持っているランナー。区間19位の13分41秒で力走、15位でタスキリレーをした。

川村栄司監督の話

「ジュニアの頃から大切に育ててきた選手を中学校、高校、大学、一般の指導者が素晴らしい連携のもとで順調に成長させていただいています。情熱を持った先生方の指導で力をつけているのが分かりました。今回和歌山県のために走って、結果を出してくれた選手たち、それと控えに回り、サポートしてくれた野村蒼（積水化学）、福岡真悠莉（和歌山北高）、吉田藍（同）、松原由佳（智辯高）、八幡羽生（下津二中）の各選手、お世話いただいた山本友希（岩出中教）、間野大奈（湯川中教）、古谷直城（有功中教）の先生方に感謝したいです」。

名指導者を訪ねて

松本一廣氏（元　和歌山工業高校陸上部監督）

～陸上競技をこよなく愛する指導者～

共にオリンピックに3度出場した青戸慎司選手、吉田雅美選手ら、優秀なアスリートを数多く育てた松本一廣氏を訪問した。1946年8月1日生まれの72歳。和歌山市在住。

中学時代は野球選手

南部小学校、南部中学校、南紀高校、中京大学卒業。教育委員会3年、西浜中学校2年、和歌山工業高校28年、海南高校で4年勤務された。

中学では野球部に所属していたが、シーズンが終わってから恩師の玉井尚先生に勧められ砲丸投の試合に出るようになった。中学卒業後は材木店で仕事をしながら、南紀高校（定）に通い、その合間に砲丸投の練習を続けていた。

高校卒業後、中京大学に進学、砲丸投で東海インカレや西日本インカレで優勝した。自己最高記録は十種競技6000点、砲丸投15m31、円盤投46m34。

黒潮国体にはラグビーで出場

1971年（昭和46年）の和歌山国体と1972年（昭和47年）の鹿児島国体にはラグビーで出場、いずれも準優勝を果たしている。

1974年（昭和48年）、茨城国体の教員砲丸投で優勝、翌1975年（昭和49年）、三重国体でも3位に入賞した。その年は日本選手権にも出場、5位に輝いた。全日本実業団大会で3位に入賞したこともある

1984年（昭和59年）には日本陸上競技連盟の投てきコーチとしてオーストラリア・アメリカ遠征を経験、ジュニアコーチとしてもアジア選手権に出場した。

2人のオリンピック選手

和歌山工業高校勤務時代には、後にそれぞれ3回オリンピックに出場することになる吉田雅美・青戸慎司を指導した。吉田雅美はやり投の元日本記録保持者でロサンゼルスオリンピックのやり投で5位に入賞、青戸慎司も100ｍの日本記録を更新し、バルセロナオリンピックでは4×100ｍリレーで6位入賞、日本新記録・アジア新記録を作った。

全国高校駅伝には通算19回出場（11年連続を含む）し、最高順位は第34回大会（昭和58年）の11位。

卒業生の中には3000ｍ障害で全国高校新記録を樹立した辻本智や、前田秀喜、宮崎展仁ら5000ｍを13分台で走った選手を育てた。箱根駅伝に出場した卒業生は6人に上る。

この他、国体の3000ｍ障害で優勝した丸田弘樹や円盤投2位の井上弥子、砲丸投2位の松本美紀、やり投2位の上続善則、全国高校選手権10000ｍ優勝の岡本和浩など全国規模の大会で活躍する選手にかかわった。

近畿選手権の砲丸投に出場した時の松本氏。今はマスターズ陸上で活躍中だ。

日高高校に勝ちたかった

昭和50年に和歌山工高に赴任したとき、当時の校長から「県駅伝で連勝中の日高高校の監督は同じ投てき選手。和歌山工業の生徒を鍛え上げて日高高校に勝ってほしい」と発破をかけられた。

その日から猛練習が始まった。

朝練で雑賀崎コース（5.7ｋｍ）を2周走らせ、片男波海岸の砂浜で100ｍを50本、17秒でダッシュさせ、15㌔以上のロード走を1㌔4分ペースで走り込ませた。

そのほか、紀三井寺の階段や住金グラウンドでのスピード練習とウエイトトレーニングを短距離と一緒に課した。

強豪校から学んだこと

全国高校駅伝には19回出場した。写真は1995年（平成7年）の第46回大会に出場した時の集合写真。右端が松本氏。

「私は投擲が専門。投擲のことなら指導に自信がある。しかし、駅伝は全くの素人。だから私は長距離の先生方から勉強させていただきました」。

「生徒の練習に付き合うのが顧問、勝手に走っておけでは実力はつかない」。

「監督は生徒に夢を持たせる能力が必要だ。強い学校の監督はみな話が上手だし、説得力もある。カリスマ性もある。私は彼らほど長くは話せないが、次第に人の話を聴いたり、何気ない会話が大好きになった。その中で指導のノウハウを無償で手に入れたとも言える」。「陸上に取り組む姿勢を学ばせるために、しばしば県外の強豪校の合宿に参加させてもらった。だんだん、生徒が練習に不平を言わなくなった」。

教え子同士が都大路を競う

昭和54年、ついに日高高校に勝った。苦節4年である。その後は都大路の常連校となった。20回目の優勝を狙った平成13年には、教え子の吉田克久が指導する和歌山北高校に敗れ、和工高の黄金期は終了した。

平成30年、その吉田が率いる和歌山北高校の17回目の優勝を阻んだのも松本が指導した藤井歩が監督する田辺工業高校だった。教え子同士の都大路争いに松本氏は目を細めた。両監督以外にも毎年実力のある中学生を育てる森端哲哉ら門下生は多数いる。

選手の思いを1年分まとめた部誌「はばたき」は27年間発行された。中学生の頃、体育教師の佐々木賢太郎先生から生活綴り方の指導を受けた。後に「体育の子」にも感銘を受け、教師になれば綴り方からも生徒にアプローチしてみたいと思っていた。短距離・投てき・跳躍の優秀な選手も巣立っている。現役・卒業生の考え方が満載の「はばたき」を読み返せばよくわかる。

指導者を卒業した松本氏は現在、全日本マスターズ陸上で優勝回数15を誇るアスリートに戻っている。

アスリート讃歌

中長距離５種目で日本新記録を出した和歌山県人

北本正路選手
（伊都中学卒・慶応大学）

慶応大学では後輩の竹中正一郎を鍛えた。

4、5人の和歌山県ランナーが大活躍

北本正路選手（1909年生まれ）

昭和の初期、和歌山県出身の長距離ランナー数名の韋駄天ぶりが日本中で脚光を浴びた時期があった。

そのうちの１人が北本正路だ。

伊都中学校（現　伊都中央高校）時代、1926年（大正15年）の全国中等陸上10000㍍で優勝し、1500㍍は2位に入っている。

箱根駅伝での韋駄天ぶりに驚愕

箱根駅伝4年連続区間賞

アンカー区間で6分29秒差をひっくり返す
昭和7年の箱根駅伝。大逆転を果たしトップを走る北本選手。

村社講平・津田晴一郎と対等の活躍をする

慶応大学進学後はベルリンオリンピックの5000㍍と10000㍍で2種目とも4位に入賞した村社講平（むらこそこうへい）選手（中央大学）やマラソンでアムステルダムオリンピック6位、ロサンゼルスオリンピック5位の津田晴一郎選手（慶応大学）らと優勝争いを繰り返していた。

5000㍍は日本記録を4年連続で更新したし、津田が持っていた10000㍍の日本記録を一気に30秒書き替えて周囲を驚かせた。

関東インカレ10000㍍で5年連続優勝した。日本選手権は5000㍍で2回、10000㍍で1回優勝している。

五輪第一次予選を兼ねて開催された第8回関東選手権大会では、5000㍍の記録を15分08秒まで伸ばした。その後、この記録に挑戦し、8秒破ったのが村社であった。

中長距離5種種目の日本記録委保持者に

破竹の勢いの北本はついに中長距離5種目の日本記録保持者となったのである。1500㍍（4分05秒　昭和6年）、2000㍍（5分52秒　昭和5年）、3000㍍（9分08秒８　昭和4年）、5000㍍（15分08秒　昭和7年）、10000㍍（31分33秒6　昭和7年）。

トラックでの活躍はもちろんのことであるが、ロードでも抜群の強さを見せた。

箱根駅伝には第9回大会（昭和3年）から第14回大会（昭和8年）までの6年間に5回出走し、1年のときは区間2位だったものの、その後は4年連続で区間賞を獲得している。

彼の才能が余すことなく発揮されたのは第13回大会（昭和7年）のときだった。

アンカーの北本はトップの日本大から6分29秒、2位の早稲田大からも5分3秒遅れてタスキを受け取った。

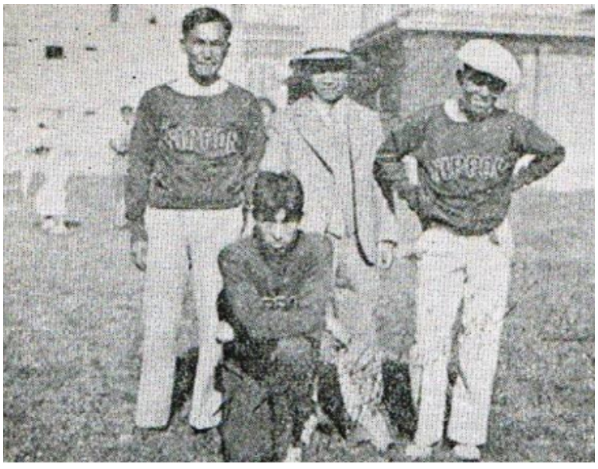
逆転など思いもつかない大差だったが、半分も行かないうちに早稲田を抜き去り、ついに日本大を増上寺山門前でとらえ、そのままトップでゴールしてしまった。

箱根駅伝95回の歴史の中で、慶応大学が優勝したのはこの時だけである。

なお優勝メンバーの中には和歌山県が誇る2人目の韋駄天・竹中正一郎も含まれている。

北本はこの年（1932年）、竹中と共にロサンゼルス五輪の5000㍍と10000㍍の代表選手に選ばれ、10000㍍は10位になった。

国内で敵なしだった5000㍍は残念ながら予選落ちだった。



ロサンゼルスオリンピック
5000m・10000m出場

選手村で練習中の北本氏（左端）。前で座っているのは同じ和歌山県出身の西田修平氏。

彼は世界の強豪たちに歯が立たなかった悔しさで、宿舎では男泣きをしたという。

卒業後、北本は孫基禎選手の練習のサポートに回り、孫が1936年のベルリン五輪マラソンで金メダルを獲得したのを喜んだ。

北本は太平洋戦争中、ニューギニアの標高4100㍍のサラワケット山越えの陣頭指揮をとった少尉である。

転進・撤退の道を容易にしたことでも有名で、戦後出版した「ニューギニアマラソン戦記」にその詳細が記されている。

息子さんの北本正孟さんは大阪万博（1970年）の責任プロデューサーを務めるなど、日本を代表するイベントプロデューサーである。

平成30年度　郷土選手の活躍状況

秩父宮賜杯　第71回全国高等学校陸上競技対校選手権大会近畿地区予選会
（平成30年6月14日～17日・滋賀　皇子山総合運動公園陸上競技場）

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	１５００ｍ	1	都築勇貴	田辺工業	３分５０秒８９
男	１５００ｍ	4	家吉新大	和歌山北	３分５１秒７１
男	５０００ｍ	6	野村優作	田辺工業	１４分３２秒３９
男	ハンマー投	4	柏木克典	和歌山工	５８ｍ７１
女	走高跳	6	松本万鈴	和歌山北	１ｍ６３
女	棒高跳	3	田畑奈都希	桐蔭	３ｍ５０
女	砲丸投	5	髙木琴音	橋本	１２ｍ９８

近畿中学校総合体育大会（平成３０年８月６日～７日・ 大阪　万国博記念競技場

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	１年１００ｍ	7	宮崎雅貴	向陽	１１秒９７
男	１年１５００ｍ	1	福島直樹	河北	４分２７秒１６
男	共通１５００ｍ	6	植阪嶺児	古佐田丘	４分１２秒５１
男	共通棒高跳	1	水口智貴	近大和歌	４ｍ１０
男	共通走幅跳	3	宮本照久	桐蔭	６ｍ７７
男	共通砲丸投	1	小林聖	南部	１５ｍ０１
女	１年１００ｍ	2	成川咲菜	下津第二	１２秒８３
女	１年１００ｍ	8	坂本実南	貴志	１３秒２７
女	１年８００ｍ	1	菱山愛里	海南	２分１９秒６３
女	１年８００ｍ	3	三宅愛香	楠見	２分２３秒５８
女	１年８００ｍ	7	福岡愛佳莉	明和	２分２６秒６５

第８５回　近畿陸上競技選手権大会（平成３０年９月１日～２日　京都：西京極総合運動公園陸上競技場）

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	２００ｍ	7	南方斗喜	岐阜経済	２１秒９２
男	１５００ｍ	6	家吉新大	和歌山北	３分５７秒４３
男	１５００ｍ	8	東本寿克	近畿大	３分５８秒３４
男	５０００ｍ	5	家吉新大	和歌山北	１４分４２秒２２
男	５０００ｍ	6	都築勇貴	田辺工業	１４分４３秒５６
男	４００ｍＨ	5	西康裕	びわスポ	５２秒２７
男	５０００ｍｗ	6	岩井和也	和歌山北	２１分５９秒５３
男	棒高跳	2	田中僚	和歌山陸	５ｍ００
男	走幅跳	5	荒木基	和歌山北	７ｍ０５
男	三段跳	1	荒木基	和歌山北	１５ｍ６５
男	砲丸投	1	鈴木孝尚	オークワ	１５ｍ５７
男	円盤投	4	北亦雄成	九州共立	４７ｍ６９
男	ハンマー投	1	北亦将成	流通経済	６１ｍ３５
男	ハンマー投	4	宮崎慧二	九州共立	５８ｍ７４
男	やり投	3	金川陽亮	明治国際	６３ｍ５５
女	１５００ｍ	2	小倉稜央	和歌山北	４分３４秒６４
女	１５００ｍ	6	上畑真由	ＵＡＣ	４分４３秒７５
女	１５００ｍ	8	古田愛弥	和歌山北	４分４９秒８６
女	５０００ｍ	4	上畑真由	ＵＡＣ	１６分４４秒１０
女	１００ｍＨ	2	宮前里帆	大阪国際	１３秒７６
女	走高跳	2	松本万鈴	和歌山北	１ｍ７０
女	円盤投	4	酒井梨々華	東京女体	４４ｍ７０
女	やり投	2	助永仁美	オークワ	55m50

第51回 近畿高等学校ユース陸上競技対校選手権大会(平成30年9月14日～16日　奈良・鴻ノ池陸上競技場)

性別	種目	順位	氏名	所属	記録
男	１年１００ｍ	3	村松駿	星林	１１秒１１
男	１年２００ｍ	3	村松駿	星林	２１秒８１
男	１年４００ｍ	8	松場文哉	熊野	５１秒３７
男	１年８００ｍ	1	堂本颯斗	橋本	１分５４秒９７
男	１年４００ｍＨ	4	松場文哉	熊野	５６秒１０
男	１年５０００ｍＷ	8	芝辻晴裕	和歌山北	２５分２１秒３８
男	１年走幅跳	6	坂部海太	桐蔭	６ｍ６３
男	１年円盤投	2	井戸良	日高	４３ｍ１１
男	１年円盤投	8	永岡新大	日高	３６ｍ４７
男	１年ハンマー投	8	畑原涼汰	日高	３７ｍ７０
男	２年１００ｍ	6	福山斗偉	星林	１０秒８９
男	２年２００ｍ	5	福山斗偉	星林	２１秒８５
男	２年５０００ｍ	1	岡田朋也	智辯和歌	１５分０２秒７９
男	２年５０００ｍ	8	家吉新大	和歌山北	１５分２４秒７６
男	２年４００ｍＨ	8	安達蓮	熊野	５７秒２８
男	２年３０００ｍＳ	3	折口雄紀	智辯和歌	９分１７秒９３
男	２年５０００ｍｗ	4	井澗洸太	田辺工業	２１分４５秒１１
男	２年走高跳	6	晄眞空	熊野	１ｍ９２
男	２年走高跳	8	榎本太一	和歌山北	１ｍ９２
男	２年棒高跳	3	井辺敬太	近大和歌	４ｍ５０
男	２年走幅跳	7	晄眞空	熊野	６ｍ８８
男	２年やり投	7	稗田敦哉	田辺	５６ｍ４０
女	１年１００ｍ	6	堂西愛加	和歌山北	１２秒４４
女	１年２００ｍ	6	堂西愛加	和歌山北	２５秒５６
女	１年８００ｍ	6	古田愛弥	和歌山北	２分１９秒８６
女	１年１００ｍＨ	2	城まなみ	那賀	１４秒６９
女	１年４００ｍＨ	6	青海夢生	那賀	１分０６秒３６
女	１年走幅跳	2	恩田玲奈	和歌山北	５ｍ４９
女	１年走幅跳	4	日根千晴	桐蔭	５ｍ２７
女	１年走幅跳	6	稲谷凪紗	桐蔭	５ｍ１９
女	１年三段跳	4	南方美羽	和歌山北	１１ｍ３７
女	１年三段跳	5	小栗七海	和歌山北	１１ｍ１６
女	１年砲丸投	4	垣内優里	海南	１１ｍ２１
女	１年円盤投	7	山原優	和歌山北	３２ｍ５０
女	２年８００ｍ	6	山本千聖	田辺	２分２２秒５０
女	２年１５００ｍ	7	福岡真悠莉	和歌山北	４分３７秒９１
女	２年走高跳	2	松本万鈴	和歌山北	１ｍ６８
女	２年棒高跳	1	田畑奈都希	桐蔭	３ｍ４０
女	２年円盤投	3	森美優	紀央館	３７ｍ１９

平成30年度の活躍状況

日本学生陸上個人選手権1500ﾒｰﾄﾙ優勝

全日本学生陸上個人選手権1500ﾒｰﾄﾙ優勝、全日本インカレ2位の橋本奈津選手（京産大3年）。大学駅伝でも活躍した。

（本文参照）

ジュニアオリンピックB砲丸投優勝

ジュニアオリンピック陸上中学男子B砲丸投で見事優勝した大島ブルースリー選手（城東中2年）靭帯断裂を克服して快挙。

（本文参照）

日本学生陸上個人選手権5千ﾒｰﾄﾙ2位

日本学生陸上故人選手権5千ﾒｰﾄﾙで13分47秒35を出して2位に入賞。出雲駅伝では区間賞を取り、箱根駅伝でも快走した。

（本文参照）

編集後記

今年6月に和歌山陸上競技協会が創設90周年を迎えます。その記念誌の作成と併行してこの広報誌を仕上げました。史料を収集する過程で知った偉大な先輩たちの業績も紹介しています。

（SIE）